
The story of “ R ” —怠惰天使の日常—

絢花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The story of “R”―怠惰天使の日常―

【Nコード】

N93350

【作者名】

絢花

【あらすじ】

天使のラースと悪魔のアズは友達同士。一緒に過ごしていくうちにラースはアズに惹かれていくが、二人の間には種族の違い故のある障害があった。それを乗り越えるための方法を探す二人だったが――「まあいいよ。何か言われたら悪魔にそそのかされたって言うから」「人のせいにするなよ!」……果たして二人は無事に乗り越えることができるのか?【BLなので苦手な方はお気をつけ下さい。E エブリスタにも同じ作品を掲載しています。 8・4はR15です。読み飛ばしても支障ありません。】

あの悪魔と出会ったのはいつだっただろうか。

いつ頃だったかは覚えていないけれど、初めてあれに逢ったときのことはなんとなく覚えている。夕陽が綺麗だったから。

あの日も俺はいつものように下界に降りていた。高層ビルが立ち並んでいて、人間は他人なんて目に入らないかのように動いていて俺はビル群の中でも一番高いビルの屋上から、それを眺めていた。

一瞬、道行く人の顔が上がり、また何事も無かったかのように歩いていく。

何があるのかと顔を向けると、夕陽が沈んでいくところだった。辺り一面を染める赤色が眩しかった。

無機質な人間たちが見ていたのはこれか。一瞬で興味を無くしていただけれど。

ふと、俺のそばに悪魔が一匹いるのに気が付いた。その悪魔も夕焼けに見惚れていた。

ぽかんとした顔がおかしくて、つい話しかけた。

「綺麗だね」

不意をつかれて驚いたのか、ふえ！？ と素っ頓狂な声を上げて、悪魔は俺の方を見た。

… … …

最寄り駅からは徒歩15分程度。

特に山道が続くわけでもなく、かといって近くに学校帰りの学生が遊んで行けるような施設も無い。

あるのは閑静な住宅街と一軒のコンビニという都会とは到底呼べない、でも田舎というほど田舎でもない場所。

そんな環境の中にある高校の、校庭に生えているでかい木の上に腰を下ろしてある教室を覗くと、教室の片隅で一組のカップルがイチヤついていた。

前後の席に座り、前に座っている方が振り返ってもう一方の耳元へと顔を寄せる。後ろに座っている方も、恋人が顔を寄せやすいように少し前かがみの姿勢になる。内緒話をしているのか、時折二人からは楽しそうに、くすくすと微笑が漏れる。

まあここまではどこにでもある普通の光景だ。

——そいつらが男同士ということを除けば。

その二人はつい最近恋人同士になった。

あいつらをくつつけたのは俺。言っとくけど仲介が趣味ってわけじゃない。仕事だ。

俺の仕事は人間を幸せにすること。

俺はいたって普通の真面目な天使。

名前はラース。

今の気分は仕事よりも昼寝がしたい。

手帳サイズの濃い赤紫色をした、魔道書みたいな装丁の分厚いノートをパーカーのポケットから取り出して……ああ、魔道書はさすがにまずいか。聖書ね、聖書。

まあとにかくそのノートを取り出して、二人の記録を書いていく。

二人をくつつけて「はい仕事終わり」ってわけにはいかず、その後も見守っていかねければならない。すごいめんどくさい。

記録を綴るペンとノートは特殊なものだ。ノートは対になっていて、一冊は俺たちが持ち、もう一冊は天界に置いてある。

片方に文字を書くとそのままだ片方のノートにも文字が現れ、それを上司がチェックしOKなら保管庫へ送られる仕組みだ。ダメならやり直し、とつき返される。

以前ペンを失くしてしまい、テキストにそこらへんにあったシャーペンで記録をつけたときには、文章の転写が上手くいかず滅茶苦茶になってしまったようでひどく怒られた。

シャーペンは人間界で購入したものだったがバレたらさらに怒られそうだったので黙っておいた。

「あれ、仕事してんの？」

めんどくさいながらも記録を取ることに集中していると、ふいに目の前が腹になって聞き覚えのある声が降ってきた。

「珍しーじゃん！」

顔を上げると見覚えのある顔があった。

アズというこの悪魔は、人間で言う外見年齢十五歳くらい。腰の少し上くらいまである緩くウェーブがかった紅っぱい髪。尖った耳、小ぶりの黒い羽。髪と同じ色のぱっちりとした瞳は、何か希少なものを見つけたときみたいに輝いている。

そしていつもこのぴったり身体にフィットしたへその出ている服を着ている。いつか腹を壊すと思う。

「俺だつてやる時はやるよ。自信作」

例の二人を指差す。アズもそれを目で追う。

「……男同士じゃん！」

「いいじゃん別に。幸せそうだよ？」

実際かなり幸せなんだと思う。

じゃなきゃあんなにイチャついたりしないだろう。しかもあいつら多分、自分たちがイチャついてるって自覚してない。

吐息がかかるくらいの近い距離にお互いの顔を寄せたり、髪を愛おしそうに撫でたりというようなことを、彼らはまるで息をするかのように無意識のままやってのけているのだ。

遠巻きに二人を見つめる女子たちは心なしか少し喜んでいるように見える。露骨に携帯を構えてシャッターチャンスを待つ者もいる。デジカメを持つ強者は……いないか。

周りがそんな風にはしゃいでいても、あの二人は自分たちを取り囲む視線に全く気づいていない。

俺が見ていて愉しいからくつつけたわけでは断じてない。

アズの顔を見ると、何やってんだコイツ……と言わんばかりの呆れと驚きが混ざった表情をしていた。

「ば……つかだなー、男同士って……それは『背徳』でしょ！？俺らの管轄じゃん！」

……しまった。

その昔、神は同性同士の愛を禁じた。えーっと……なんでだっけ？　なんか自然の摂理にどうのこうのとかそんな理由だったはず。神の御心に反すること、それ即ち“背徳”――

モロに悪魔の得意分野だな……。

たまたまあの二人を見かけたとき、明らかに両思いだったからくつつけた。

性別は気にしなかった。好きならくつつけばいいと思ったし。っていつか好き合ってるのに結ばれちゃいけないとかおかしくない？

「ラース……今までにどのくらいやっちゃったの……？」

「……」

どのくらい作っただっけ？　あんまりよく覚えてないけど、この頭の片隅にほんの少しだけこびりついて残ってる僅かな記憶を頼りに思い返してみよう。

1、2、3……あれ？　これとかそれとかも入るのかな……じゃ

あ4、5……。

「……数えるのを軽く諦めるくらいには」

そんなに？ とまたアズが呆れた顔をする。

この学校にはなぜか男同士で惹かれ合ってる奴らが多かった。共学なのに。とりあえず皆くつつけておいたのだ。

「まあいいよ。何か言われたら悪魔にそそのかされたって言うから」

ノートに目を移して間違いがないか確認する。

気づくと教室には誰もいなくなっていた。移動教室か何かだろう。ちようどあの二人の記録もつけ終わったところだし、帰ることにする。

デニムについた土埃を払い、ほんの少し背中に力を入れて消していた羽を伸ばす。俺の羽はアズのもので大体同じぐらいか、やや大きい。

肩甲骨のあたりに軽く力を入れることで、自由に羽を出したり収納したりできる。

この感覚は……、説明し辛いな。とにかく出したいときに消せし、いらないうときには消すことができる。だから羽は邪魔なときには消している。出しっぱなしだとばさばさするし羽根抜けるし場所とるし。

俺なんかはまだいい方で、俺の上司…教育係？ なんかは六枚のでかい羽をしているから、いつ見ても邪魔そうだ。ていうかもさい。彼も屋内にいるときは消している。

なんか俺の羽、最近うつすらグレーがかってきたような気がするんだけど……。それとも元からこうだったかな。

……ああ、言っておくけどこれは俺が実は悪魔とかいう伏線でも何でもない。

「なあっラース、人のせいにするなよ!？」

俺が飛び立つてすぐに慌てた様子でアズが追ってきた。

そもそも悪魔って人なんだろうか。だから今の台詞は正しくはこう。「悪魔のせいにするなよ」……いやこれは変だな。

「別に、アズのせいにしたって支障ないでしょ」

悪魔なんだし。

「あるっ……あれ？　ないかな……えーと……」

頭の上にたくさんクのエスチョンマークを浮かべて考え込むアズ。アズはどこか……というかほとんど抜けていて見ていて飽きないたまに突拍子のないことを言ってきたりもするし面白い。大体天使と仲良くする悪魔なんてどうかしてる。……それは俺もか。

「背徳は悪魔の管轄なんですよ。アズにそそのかされたことにしたって別にいいじゃん」

「だ……からラースとつるんだとか考えられたら厄介じゃん」

「アズが俺の仕事邪魔しに来たことにすればいい」

なんかすごい悩んでる。なんかなんとも言えない、しいて言うなら巨大迷路のゴール地点にやっとたどり着いたのに実はダミーだったときみたいな複雑な顔してる。

よくわからない？ 大丈夫、俺も何言ってるのかよくわかってない。わかるのは今のアズの百面相が面白いつてことだけだ。

「天使の邪魔するのも悪魔の仕事だし」

「そうだけど論点違うじゃん」

確かに俺がアズ相手に邪魔されて負けるわけないか。それをそのまま言ったら顔を赤くして怒った。

「ちつがうよ！！ もうっ人がせつかく心配してやってんのに！
知らないっ」

悪魔のくせに俺の心配してくれてるとか。変な奴。
しかも怒ってても全然怖くない。

くるつと後ろを向いて、アズはそのまま何も言わずに飛び去っていく。仕事も一区切りついている俺は、他にやることもないのでついていくことにした。

後をついてきていることに気付いたアズに、来るなよと抗議されたが軽く無視する。

とりあえず俺もこっちに用があると言っただけ言ってみたが、案の定それ嘘だろと一蹴されてしまった。

「本当だつてば。アズについてくつていう用事がある」

「そんなの用事じゃないよ！ そーいうのへりくつてゆーんだよ」

「そんなに怒るとシワが増えるよ」

「ないし！ 大体誰のせいだよ！」

前を行くアズに向かって言葉を掛ける。ここからだと言アズがどんな顔をしているかはわからないが、ちっとも悪びれない俺とのやり取りでむくれているところを想像すると、……やっぱりちよっと面白い。

…
…
…
…

俺たちが住んでいる世界は、白と黒、そして灰の三つの領域に分かれています。

白の領域には俺たち天使が。

黒の領域にはアズたち悪魔が。

お互いの領域に迂闊には近寄れない。天使と悪魔は体の造りが違うから、天使は黒の領域に入ることにはできない。いや、入るだけならできるが、黒の領域に充滿している瘴気に聖気が拒否反応を起こしてすぐに倒れてしまう。逆もまた然りだ。っていうことを昔教育係に聞いた気がする。

そしてこの灰の領域は白と黒を繋ぐ中間地点。唯一、白と黒の者が共存できる領域だ。もっとも灰に暮らしている奴なんて誰一人としていない。

…
…
…
…

ずっとアズの後を追うようにして飛んでいたが、灰の領域まで来て横に並んだ。

ちらつとアズの方を見ると、「そういえば、この前ベルとリツタがね……」と世間話をし始めたので、いつの間にか機嫌は直ったみたいだ。

一通り話を聞き終えたところで、ついでにふと疑問に思ったことを投げかける。

「今日はお守り、いないの？」

「おもり？ …… ああ、エルのこと？ あっ」

その名前を口にした途端、アズはしまったとい表情になり両手で自分の口を塞いだ。

だがそんな些細な抵抗に意味はなく、突如出現した長身の男が後ろからアズの体を抱き締めた。

「あゝ…… 名前言っちゃった……」

アズが肩を落として呟く。

「ここに来るないつも言っているだろう」

「ちが…… 違うよっ」

男の問い掛けをアズは慌てて否定する。

腰よりも長い蒼みがかった黒髪、六枚の漆黒の羽を持ち、肩から

足までをすつぽり覆い隠す黒衣を身に纏う、怖ろしく整った顔の男。そこらへんの雑魚なんて一睨みしただけで殺せるだろう。そんな迫力がある。

この男がアズの上司、名前はエル。アズがその名前を口にする、どこからともなく現れる。

俺の教育係にそんなGPS機能ついてなくてよかった。

「学習しないよね、アズ」

今までにも何回かこういうことがあった。そしてアズはその度に連れ戻される。

こうなるともう遊ぶことはできないので、今度こそおとなしく帰ることにしよう。

じゃあ俺はこれで二人に背を向けると、アズが名残惜しそうに俺の名前を呼んだ。

少しだけ振り向いて小さく手を振る。

「ラース……」

「来い」

少しだけ微笑んだように見えたアズの腕を引っ張ってエルは飛び立った。アズは何度かこちらを振り返りつつ去って行った。

エルは俺とアズが一緒にいても俺をどうにかしようとしたことは無い。天使を見たら食べようと襲い掛かってきてもおかしくないのに。

まあエルは上級な悪魔みたいだし、俺みたいな下っぱには興味も何もないのかもしれない。

でもそういえば上級な天使なのに襲われないのが一人――

アズの姿が完全に見えなくなっしてから前に向き直ると、いた。

「ラース」

「げ サファ……」

「『げ』とは何です」

出たよ……。

俺の上司兼教育係のサファ。外見年齢は二十五歳くらい。

よく人間が想像するようなゆったりとした布の衣ではなく、サイドに蒼いラインの入った白い詰襟の上着に動きやすいパンツルック。腰まであるストレートの金髪に碧眼、六枚の純白の羽、その瞳からは強い意志を持った輝きとプライドの高さが窺える。気高い雰囲気醸し出す、まさに天使の見本のような男。

口うるさい性格が玉にキズ。

「またあの悪魔と会っていたんですね」

「あー……ないよ」

「見てましたよ。全部」

見られてた。

仁王立ちしているサファの顔が余計に険しいものになっていく。サファは悪魔のことを異常に嫌っている。当然俺がアズと馴れ合っていることを良く思っていない。

まあ悪魔のことが好きな天使なんているわけないんだけどさ。

「何度も言っているでしょう。悪魔なんて近寄るものじゃない」

「向こうから近寄ってきた場合は？」

「離れなさい。特にあの男には注意しなくてはいいけませんよ」

俺が仕事をサボ……休憩しているときにアズはよく寄ってくる。たまに仕事をしていても今日みたいに寄ってくる。つまり俺を見ればサファがいない限りいつでも寄ってくる。犬みたいだ。

逆に俺が仕事のアズに寄っていくことはあまりない。行っても今仕事だからとか何とか言っただけで仕事を続けるからつまらないし、なんかむかつく。

「何考えてるんです？ 行きますよ」

促されて、前を飛ぶサファの後に俺も続く。

相変わらずこの六枚の羽はでかくて邪魔そうだ。天使に幻想を抱いている人間の瞳には、とても美しいものとして映るだろうが。

「罰掃除してもらいますからね」

「ええー……」

前を向いたままサファが言う。

……天使なんだからもつと寛容になればいいのに。

ブツブツ文句を言ったり言われたりしつつ、俺たちも灰の領域を後にした。

…
…
…
…

これは最早常識みたいなものだけど、俺ら人ならざる者の姿が人間に見えることは無い。なんか見ている次元が微妙にズレてるからだとかなんとか聞いた気がするけど忘れた。

とにかく、人間にも視覚的に見えるように姿を現すことがない限りはまず見えない。

通常の状態の俺らのことが見えるなんて奴は、変人が変態だ。

…
…
…
…

今日の仕事も恋の後始末もといアフターサポート。この間の木に腰掛け、例の教室を覗き込む。ノートを広げて書き込もうとしたとき、どこからかふんふんと鼻歌が聞こえてきた。

……何でいつも俺とかち合うんだ。

この間抜けな声は確かめなくとも十中八九アズのものだ。
続く声はとても楽しそうに、

「誰を不幸にしようかなー♪ よし！ 一人目」

……人の仕事を増やさないでほしい。ただでさえめんどくさいっていうのに。

何しろ校内で惹かれ合う者同士片っ端からくつつけたから、アフターサポートだけで何組もの記録をつけなくてはならない。

手が痛くなるから嫌なんだよね。張り切んなきゃよかった。

この上目の前で人間を不幸にされたらたまったものじゃない。俺が目一杯幸せを与えなきゃなんなくなるじゃん。

「何してんの」

「うわっ！ ……っラース……」

本当は仕事中的アズには近寄りたくないけど仕方ない。
声を掛けると、アズはビクッと全身の毛を逆立ててこっちを向いた。

オーバーリアクションじゃないか今は。思わずこっちもひっくり返りそうになった。びっくりした。

「何でいるの!？」

何でも何も、こっちも仕事だ。
あくびまじりの声で答える。

「経過観察」

「経過……この前の？」

「まあそれもあるけど、色々と」

「色々って？ ……まさか他の人たちとか？」

そう言いながらアズはふよふよと近付いてきて俺の隣に座り、背を丸めてこっちを見上げてきた。
自然と上目遣いになっている。

そういえばこの前サファに近付くなつて言われたとかぼんやり思い出しながら、こんな悪魔に何ができるわけでもないからいいかとか考えて、よく見ると目でかいなとか思った。

「ラース？」

「……ああ、あそこら辺にいくつか」

例の教室を指差す。

教室の後ろの方に、クラスメイトからは見えないうちにカーテンの陰に隠れてイチャついてる二人の姿があった。こっちは丸見えだけ。

この二人はこの前の二人ではない。

「……。」

アズは黙ったまま俺に哀れなものを見るような視線を投げかけてきた。何その目。

アズの視線は気にしないことにする。

「あとどれだっけな……」

まだ他にも俺が作ったカップルがいるはずだが、今は教室内にはいないようだ。

そういえば他のクラスにも作ったな。

そっちも見てこようと飛び立つと、何故かアズもついてきた。

さっきの教室より一つ上の階、向かって一番左端の教室。

窓際で、金髪というよりは黄色い髪をした目つきの悪い男が女の子に抱きついていた。

あの男は麻元庄也^{あさもとじょうや}。確かこの高校に併設されている中等部の生徒だ。なんでこんなところにいるのかというと、恋人の春日伊吹^{かすがいぶき}に会うために他ならない。

が。

あれ？

あのやたらと目立つ髪色には見覚えあるけど、あんな女の子とくっつけたっけ。

俺のおぼろげな記憶によると春日伊吹は男だった気がするんだが。

まあいいか。女が相手なら背徳にもならないし。

「まあよくないよ……ちゃんと覚えときなよ」

横でアズが何か呟いたような気がするが聞こえなかった振りをする。

ノートに記録を書き込み、また顔をその教室に向けると、微妙に顔を引きつらせた一人の男子生徒と目が合った。

——ただの偶然か、それとも変人か変態か。
見間違いではない。目が合った後、その男ははっとして顔を背けていた。

……確実に俺らが見えてる。

「アズちよつとこつち来て」

「なに？」

男の姿がよく見えるように窓に近付き、アズに指し示す。

「あの人。目が合ったのに逸らされた」

「え？ 気のせいだろ？」

そんなことはない、と思う。挙動不審だったし。確かめるために手を振ってみる。

俺が手を振っているのに気付くと、男はギョツとしたように見えた。

振り続けてみる。

振り続ける。

……。

男は観念したのか、さっきよりも引きつった微笑をこちらに向け
た。

アズが目をみはる。

「えっ？」

「ね、見えてるでしょ」

男が俺らの姿を捉えているのが分かると、アズはすげえっと言う
や否や男に向かって飛んでいった。

俺たちは可視状態じゃなければ、つまり普通の人間には見えてい
ない状態なら、障害物はすり抜けられる。アズも閉まっていた窓に
ぶつかって潰れたカエルのようになることもなく男の前に降り立っ
た。

それにしてももう少し考えて行動したらどうか。もし相手が人間
じゃなくて、何かよくないモノだったらどうするのか。そこまで考
えて、アズこそ「何かよくないモノ」だったことに気づいた。

ちよつと心配して損した。

そんなことを考えながら、呑気にはしゃぐアズに少し遅れて俺も
その横に降り立った。

「ねーねー、俺が見えんのっ!？」

「え……いやあのほら、」

「どうかした？」

突然の珍入者に戸惑う男に、目の前で何が起こっているのか知る由もないクラスメイトが怪訝そうに話し掛ける。

さらさらの薄茶の髪をしたその男はカッコいいというよりとても綺麗で中性的な顔をしていて、困っている顔すら様になっている。ファンクラブでもあって王子とか言われて祭り上げられてそうだ。それにしてもものすごい困っている。

「なー名前なんてゆーの？」

男の困惑なんてそっちのけで、アズは瞳をキラキラさせながらどんどん質問を投げかける。

「体調でも悪いのか？ 清^{しん}」

先程のクラスメイトも心配そうに問いかける。

苗字か下の名前かはわからないがとりあえず清というようだ。

「清だつて」

「清っ？」

ふと清に話し掛けている人間を見ると、庄也に抱きつかれていた女の子だった。

……何故か男物の制服を着ていた。

「なあこつち向けてば伊吹、王子様なら大丈夫だつてば」

「ん、もうちょっと待ってな 庄也」

女の子に後ろからへばりつい……抱きついたままの庄也が言う。

やっぱりあだ名は王子様か。

さっきの清に対する印象はさほど間違っていなかったようだ。

困ったような嬉しいような、微苦笑を浮かべているその女の子は、明るい色をした肩を越すくらいの長さの髪を後ろで一つに束ねている。色白で微笑まれただけで心を奪われかねない甘い顔。しかし着ているのは男物の制服。そういう趣味か。

……ていうか今、庄也に伊吹って呼ばれてなかった？

「……アズ。あれ、と思う」

「あれって？ 別に普通の女の子じゃ……あれ？ 男……？」

二人して伊吹（と呼ばれた女の子？）をじっと観察する。

……ダメださっぱりわからない。

清が王子様なら伊吹はお姫様だ。さしずめ庄也は番犬だな。

「……ごめん、やっぱり保健室行ってくる」

「大丈夫か？」

「うん」

そう言つと清はこちらに目配せして教室を出ていった。ついてこいということか。

俺とアズは顔を見合わせてから、清の後を追った。

屋上まで来ると、清は俺たちの他に誰もいないことを確認してから静かにドアを閉めた。しかしどんなに頑張つて静かに閉めようとしても、造られてからそれなりの年月が経ち、所々錆びてしまっているこの鉄製の重厚な扉は、かすかに軋む音を抑えきれはしない。

屋上からは遠くの景色までよく見渡せた。

一番遠くにはそんなに高くない山並みが連なっていて、その手前にはいくつもの、やはりそんなに高くない家や店などの建物。所々に緑が見える。

天使としての階級がもつと上の方になると、ここから見えるよりもずっと広い街や国、そこに住む者を導かなければならなくなることもある。絶対やだ。

ちなみに俺に担当区域は無い。とりあえずキューピッド的なことをしたり、不幸そうな人がいたら道に落ちている百円に気付かせるとか、現在地から目的地まで全部青信号にしてあげるとかしている。みみっちい？ 全てが不幸だったときにはどんな些細なことだって嬉しく感じるものだよ。多分だけだ。

それは置いて、とにかく今は清についてだ。

清がこっちに向き直って口を開こうとしたので遮ってみた。

「こんなところに連れ込んでどうするつもり」

「君たち何してるの？」

あつさり流された。

いくら王子様と言えど、もう少しツツコミの腕を磨いた方がいいんじゃないか。若干不服に思いつつも答える。

「仕事で。経過観察」

「俺も仕事ー」

「二人で同じ場所？ 別の場所でやればいいのに…」

「それはそうなんだけど。俺が仕事してるといつもアズが寄ってくるんだよ」

「今日は逆だよ」

さっき俺が木の上に座っていたところに鼻歌歌いながらやって来たのはどこの誰だったんだ。

「俺が先にいたよ」

「俺だよ」

「後から来たでしょ」

「わかんないよ」

一歩も引こうとしないアズと言い合いを続けていると、見かねた清が止めに入ってきた。

「まあまあ……とにかく他の人には見えないんだから、いきなり話し掛けられても困るよ」

な？　と言つて俺とアズを交互に見る。

そうだ、なんで清には俺たちの姿が見えるんだろう。やっぱり変人なのか？

「そうだよ、何で清は俺たちが見えるの」

「何でつて言われてもな……。俺にもわからないし、時々見えることがあるとしか言えないよ」

そんなことが本当にあるのか、いささか信じられない。けれど、この男が嘘をついているようにも見えない。見たところ特に警戒すべき怪しい点もないし、ただの不思議少年なんだろうか。

今までに俺の姿が見えた人間なんていなかったし、面白い奴に出会えたみたいだ。

清が怪しい何かじゃないことが分かったところで次の疑問をぶつける。

「さっきの女の子。男？」

「え？」

我ながら唐突すぎて意味のわからない疑問文になってしまった。言い直す。

「春日伊吹って女だったっけ」

「伊吹？」

突然出てきた自分のクラスメイトの名前に軽く驚く清。
しかしすぐに、

「伊吹は男だよ」

そして一呼吸おいて、端正な顔に苦笑を浮かべてこう付け足した。

「それ禁句だからね」

… … …

やはり伊吹は男で、俺のおぼろげな記憶は正しかった。
その後の清の話はこうだ。

伊吹は幼い頃から女顔だったせいで、出会う人出会う人、それはもう大勢から女と間違われる人生を歩んできたらしい。そしてその女顔と、顔に似合わない（清曰く）やんちゃな性格からくるギャップのせいもあり、元々かなりモテていたそうで、告白してくる人中には男もちらほらいたとか。

それが庄也と付き合うようになってからは、自身の恋人のせいでフェロモンを撒き散らすようになり、言い寄ってくる男が急増しているという。

そんな理由が重なってか、とにかく女に間違われるのが嫌なんだとか。

いや、でもあれは一目見て男だって分かるほうが少ないと思う。
ムキムキマッチョにでもならない限り無理だと思うが、多分そんな日は来ないだろう。まあ、心の中でこっそりとエールを送っておきたい。

「ふーん……アズ気を付けなよ」

「うん……ってレースがだろっ」

アズにはしつかり言っておかないとあっさり口にしてしまうから俺が気を付けてないと。と思って心配して言ったのに、アズは心外そうな面持ちで抗議してきた。

自分のこと分かってないなこれは。

「アズは口滑らせやすい」

「それはレースだろっ」

俺そんなことないもんっ。

そんな雰囲気で一瞬懸命に否定してくるアズをアホだなあとか考
えながら眺めていると、清が再び仲裁に入ってきて、アズを見て尋
ねた。

「まあまあ、それより……君は悪魔……だよな？」

「そっだよ。俺はアズでこっちはレースってゆーんだ」

「君は……天使だね」

清がふつてきたので、俺はそうだと首を縦に振る。どこからどう見ても俺は天使で、アズは悪魔だ。実は人間でしたドッキリでしたなんてオチはどこを探したって用意されていない。

アズが俺にはふくれっ面を見せていたくせに、清にはぱつと嬉しそうな顔になったことにちよつとムツとする。だが、そのままごく簡潔な自己紹介をしてくれて、且つ清も的確に状況を把握してくれたのでわざわざ説明する手間が省けた。

清は頭の回転が速くていいな。こんな非現実的な状況にもう若干馴染んできている。

もしかしたらいっぱいはいいで、既に自分の許容量をはるかに越えてそのまま360度回転して逆に落ち着いているだけかもしれないが。

そして、十人のうち九人は俺とアズを見たら当たり前にそう思うだろう疑問を口にした。

ちなみに残りの一人は頭のとっぺんからつま先まで無関心で構成されている奴か、俺らのことをコスプレイヤーだと思っ超現実主義者かだ。

「二人は一緒にいていいの？」

アズは虚をつかれたように一瞬息をのんで、「……いけないんだ、本当は」と呟くように答えた。

そうやって目を伏せてポツリと声を漏らすように答える様子だと

ても寂しそうに見えて、俺はなぜか無性に抱き締めたくなった。

や、しないけどさ。セクハラになるし。……セクハラって言ってもアズには伝わらないだろうな。「せくはら？」とか言って小首をかしげながらこちらを見ている図がありありと想像できる。

まあとにかく、それをしないかわりに元気づけよう。
清に肯定の頷きを返し作戦を実行する。

「でもアズが俺に会いたがるから」

「あつ会いたがってないよ！」

またしてもすぐに否定される。

違うの？ と聞くとすました顔で違うよ、と返された。予想の範疇だな。

そしてアズがかげらほども想像していないだろう言葉を告げた。

「なんだ、俺はアズに会いたかったけど」

「えっ……？」

退屈しないしね。

俺が告げたセリフの意味を考えるように俺を見たまま動きが止まり、その後悟ったのかアズの頬が心なし紅潮したように見えた。

ああ、アズのこのふわつとしたところは好きだな。ずっと見ていたくなる。

だけど百面相も好きなので。

「でもこれからはアズ見ても五回に四回は声かけないことにするよ。わー残念だ」

「えっやだ！ 俺も会いたかったよ！」

少し意地悪なことを言うと、はつとして慌てて前言を取り消した。アズを見やると本気で焦っているのか眉は垂れ下がって、あわわという効果音が聞こえてくるみたいだ。頭の斜め横にたくさん汗マークが見える。

「いいよ無理しないで」と追い討ちをかけると、「本当だよ！」とまた躍起になって主張する。

今の俺の心境はびよびよ鳴く雛鳥を微笑ましく見守る親鳥だな。もう少し遊びたいところだけど、そろそろ冗談だと言わないと本当に泣くかもしれない。

クス、と一瞬微笑み今までのセリフをくつがえす一言を囁く。それを聞いたアズはまた双眸を大きく開き安堵の息を吐いた。そしてぶん！ と（チンケな表現だけどこれが一番しつくり来る）怒った。

「もうラースなんて知らない！ ……それより清、俺と契約しない？ 魂くれるなら何でも叶えてあげるよ」

そう言いながら清に向き直り、妖しい笑みを作る。全然キャラに合っていないからもう少し自分に合う笑い方を研究した方がいいだろう。

しかし悪魔の契約か。これは天使として見逃すわけにはいかない。忘れかけてたけどアズって悪魔だったな、そういえば。

契約を迫る悪魔と契約の意味がよく分からず話が読めていない清の間に割って入り、アズを見据える。

「ちょっと、それは見過ごせないな」

「邪魔すんなよ」

「俺の目が黒いうちはそんなことさせない」

「黒くないじゃん」

青だった。

「……とにかくダメ」

アズはしばらく「えー」とか「けち」とか抗議の声を上げていたが、俺のかい摘んだ説明により契約についてやっと理解した清に大変あっさり断られ、しぶしぶ諦めた。

そこで俺は清の手を握って目を見つめ、言った。

「じゃあ俺と契約してみない？」

把持している手の持ち主を見ると、え？ 天使って契約とかすんの？ と目をぱちくりさせている。

天使は見返りを求めないから契約なんてしない。タダ働きもいとこだ。

でもこの不思議少年なら側にいて飽きることはないだろうし、専属で守護天使になってもいい。

むしろその方が面白いからそうしたい。

横では獲物を取り逃した悪魔が「横取りずるいぞつ」とか喚いていた。

ひとしきり騒いでしばらくすると、この悪魔はまた何かろくでもないことを思い付いたのか、俺の手から清を奪った。

「清、それじゃ俺と友達になろつ。それならいーだろ?」

「ああ……それなら」

「やった!」

アズは俺から奪った手を握ったままころころと喜んでゐる。それを見てみると、なんかよく分からないけどむかついてきた。

これはやり返さねばなるまい。

清の手をまた奪い返してさっきと同じ体勢をとる。

「清、俺と友達以上になろつ」

「なんだそれ」

「なっ!?!」

アズはわなわなと、言ってることがわからないというような変な顔をしてこつちを見ている。よし、復讐成功だ。何に対する復讐なのかはわからないが。

清に「うんいいよ」と言われても困るので改めて自分も友達にな

りたい旨を伝えると、今度は快諾してくれた。

友達以上は恋人なんだろうが、友達以上恋人以上って何だとふと気になったので聞いてみたら、キョトンとした様子で夫婦じゃない？と言われた。言われてみれば確かにそうだ。

こんなにあっさり答えられるなんてやっぱりただ者じゃないな。

それにしても。

日常生活の中にいきなり現れた不思議生命体×2を前にして怖がりも慌てふためいたりもしないなんて、清の精神構造はどうなっているんだろう。よっぽどこういう事態に慣れているんだろうか。

でもいつも現れるものが無害だとは限らないわけであつて。

「……ていうかね、こんな得体の知れないのとはいはい友達になっちゃ駄目だよ。しかもアズは仮にも悪魔なんだし……仮にも」

アズを横目に見つつ、大事なことから二回言っておいた。

「仮にもって何だよ！俺はれっきとした悪魔だ」

「その点俺は誠実な天使だから安全だけど」

小さな抗議を無視してその後を続けようとすると、憤慨したアズが遮ってきた。

「ラーズの方が危ないよつ。怠け者の天使なんて他にいないもん」

なんてことを言い出すんだこのアズは。今日だってほかほかした

天気で昼寝したいのを我慢して仕事をしていたからこそ、こうして清に出会えたのに。

俺以上に働いてる天使がいるとでも思ってるんだろうか。いっぱいいいるけども。

一人蚊帳の外の清を見ると、いつ口を挟めばいいのかわからないといった顔をしていた。

「アズが俺の分まで働いてるからいいの」

「ダメでしょ」

何もハモらなくても。個々人の働きを平均して割ればちょうどいいと思うんだけどな。仕事の内容は真逆だけど。

「あ、俺そろそろ戻らないと」

携帯で時間を確認しながら清が言った。

そういえば今は昼休みとかいう時間だったな。

気付くとさつきまでの喧騒が、未だわずかながらあるものの静まってきた。

「誰かに見られなくて良かったね。これ見られてたら清一人で喋ってる変な人決定だったよ」

「わかってるならこれからは人前で話しかけるなよ？」

「アズに言つて」

ため息混じりにどこまでも爽やかな清が言う。だが止める暇も無

く清に突っ込んでいったのはアズだ。

「へへ。努力するよ」

にこーっと言うアズに説得力はかけられない。

清はまたため息をつくとかやれやれとでもいうように微苦笑を見せ、
じゃあ、と小さく手を振って去っていった。

その仕草はやはりどこまでも爽やかだった。

珍しく早いうちに仕事を終わらせられたので、いつものように青々と茂った葉をさわさわと揺らす、灰の領域の中でも一際大きくて立派な樹へと向かう。

最近はずと仕事中にたまたま会うことが続いたが、いつもは仕事が終わった後にこの樹で落ち合っている。

この樹は今よりもずっと昔、まだ俺もサファも生まれる前、それこそ神話の中の神々がまだ生きていた時代から生えていたらしい。

まだ俺が小さかった頃、もうしわくちやのじーさんになった天使が、これを見上げて真つ白な髭を撫でながら「懐かしいの」なんて言ってたのを覚えている。

もうずっとずっと昔から、天使と悪魔を、そして人間を見つめてきた樹だ。

なんとかかんとかツリーって言うらしいんだけど何回聞いても名前覚えられない。

…
…
…
…

遠くから上の方の太い枝に腰掛けているアズの姿が見えた。

——俺より先にいるなんて珍しいな。

すぐに近づいて声をかけようとしたが、何だかいつもと様子が違うことに気付いた。普段はやたらうるさ……元気なのに、やけに沈んでいるように見える。まるで見えない耳が伏せているみたいだ。どうしたんだろう。楽しみにしていたお菓子を誰かに横取りでもされたんだろうか。その可能性はかなり高い。

「アズ、どうかしたの」

「ラース……」

しょんぼりしているアズの前まで行って声をかけると、俯いていた顔を上げた。そしてその見かけに反することなく、しょんぼりした声を出した。

「清と話したこと怒られた……」

「え？」

「ターゲットじゃない人間と話すなって……」

怒られた、というのはやはりあの上司にだろう。

ただでさえ立っているだけで近寄りがたいオーラ全開なのに、あれが怒ったら一体どうなるんだ。想像もできない……というかしたくない。

「誤魔化せばよかったのに」

人間と話していた、なんていくらでも言い訳がきく。契約を結ばうとしていたんだとか、そこに天使が邪魔しにきて結局逃してしまったとか。うん、嘘はついてないな。そのあと友達になったとか口を滑らせなければ完璧だ。

しかしアズは弱々しく首を横に振った。

「見られてたみたい……」

「あー……」

それなら誤魔化しはきかないな。清と友達になったことだって筒抜けだろうし。

あの悪魔——エルがどうやって様子を見ていたのかは分からない。だけどアズが彼の名前を口にしただけでアズの居場所を掴むことができるのだから、こちらに気付かれずに監視することなんて容易なんだろう。

すごいな。

つくづく俺の上司じゃなくてよかった。多分サファはそんなことできないし。

「……今も見てたりして」

「うん……見てるかも……」

マジで。

「冗談のつもりで言った言葉に予想外の肯定を得てしまい、ちょっとたじろいだ。」

どこかから見られているなんて気分のいいもんじゃない。心なしか背中が痒くなってくる。プライバシーの侵害反対。

一人で無意味な反対運動をしていると、アズがまたポツリと呟いた。

「あとね……天使と悪魔は仲良くなれないんだって」

どうやらアズが落ち込んでいたのは、単にエルに怒られたからという理由だけではないらしい。

仲良くなれない、ってどういう意味なんだ？ 少なくとも俺はアズと仲良いつもりなんだけど。

「そうなの？」

「うん。触れないんだって……」

「触れない？」

「うん……バチッとするのかな？」

「バチッて……って」

何しろ初めて聞くことなので、さっきからアズの言うことをお返すに言うことしかできない。

触れない？

どういつことなんだろう。何か見えない力が働くのか、それとも触ろうとするとサファとかエルが邪魔しに來るとでも言うのか。……すごい嫌だな、それ。

しばらく頭を捻ってみたが、答えが見つかるはずもなく。ふと横を見ると、アズも同じようにうーんと唸りながら考え込んでいるようだった。

考えてみても答えが出ないのなら、実際にやってみるしかないか。痛かったりするの嫌だけど、もしかしたら俺とアズを裂くためにエルが嘘ついたのかもしれないし。

……でもあいつがそんなみみっちいことするとは思えないんだよね、なんとなく。

真剣な顔をして考え込んでいるアズの前に、俺は手を差し出す。アズはそれに気付くところらに不思議そうな顔を向けた。

「触ってみる？」

「え……でも」

つい、と差し出された手に若干戸惑いつつも、アズの視線はそれに注がれている。

俺が次の言葉を促すとアズはそれから視線を外し、またしても俺の思いもしなかった言葉を紡いだ。

「でも？」

「ラーズ傷つけたらやだ……」

悪魔って人を傷つけるのが仕事じゃないのか？ 本当に変わっているというか、邪気の塊のくせに無邪気っていうか……。

……それに、誰かから傷つけたくないなんて言われたの、生まれて初めてだ。

思わず頬が緩んでしまう。

しかしなんか気恥ずかしいので、それを悟られまいと出来る限りの無表情を装った。

「仲良くなれないって言っても、もう俺ら仲良いでしょ」

「そだけど……」

「今まで触らないで何か支障あった？」

「ないけど……」

そういえば今までお互いに触ったことなかったんだな。本能的に回避していたんだろうか。

アズは相変わらずしゅんとしている。

いつまでもこのままでは埒が開かないので、右手でそつとアズの肩に触れてみた。

「っ」

すると、バチツという何かが爆ぜるような音がして、小さな鋭い痛みが俺の右手を走った。

軽く触れただけだったせいか、なんかでかい静電気が起こったみたいなきんじくだった。

痛みを振り払うように手を振る。手のひらを見ても特に焦げたり

溶けたりはしていない。

不意に身体を触られたアズは、たった今俺が何をしたのか、そして何が起こったのか信じられないといった表情で俺の顔と手を交互に見ている。

ピリピリしたこの痛みよりも——その余韻もすぐに引いたが——どうして触れただけでこうなるのかが不思議で、俺の旺盛な好奇心はもっと詳しく知りたくなった。

「ちょっと痛い」

「な……っ なっ何してんの!？」

「本当だっ たんだね。 ちょっと面白い」

「面白くないよ! 大丈夫!？」

「アズも痛いのか？」

「俺? 俺はそんなに……」

「ふうん。 どういう原理なんだろ」

「わかんない……っ てそーじゃなくて! 手!」

俺はマイペースに話を続けようとするがアズはそれどころではないようだ。

顔面蒼白なアズに、なんともないと言う代わりにヒラヒラと手を振ってみせる。いくら口で大丈夫だと言っても信用しないだろう。

アズはそれを手に取って見ようとして、はっと気付くと慌てて自分の手を後ろに引っ込めた。

そして顔を近付けて俺の手に異常が無いことを確認すると、ほっと安堵のため息をついた。

アズが落ち着いたところで、次の段階に移る。

「じゃあ次はアズから触ってみてよ」

「へっ」

「悪魔から触ったらどうなるか知りたい」

「でもまた今みたいになつたら……」

「すぐ離せば平気だよ」

そしてまた俺はアズの前に手を差し出した。

アズはしばらく悩んでいたが、やはり自身の好奇心には勝てなかったようで、おそろおそろ手を伸ばしてきた。その視線はやはり、じ　と俺のそれに向いている。

本当にかすかに、触れるか触れないかというくらいそつと、アズの手が俺の手のひらを撫でた。

ぱち

「痛」

小さな気泡が弾けたような音。

大して痛みは感じなかったが反射的に声が出てしまい、それを聞

近で聞いたアズは「ごつごめん」と言いながらあたふたと離れた。

「アズは全然痛くないの？」

コク、と頷きだけが言葉を伴わずに返ってくる。

やはり痛みを感じるのは天使だけなのか。……それって不公平じゃないか？

もしかして悪魔は全ての痛みを感じなかったりするのだろうか。かなり突飛な想像だとは思うが絶対に無いとは言い切れない。これはぜひ確認しなければ。

すっかりしよげてしまったアズは不安そうにこちらを見つめている。

その頬を思いっきりむにと摘んだ。

「ひにゃー！」という困惑の声と肌同士が触れ合い爆ぜる音が重なる。あ、これはちよつとマジ痛い。

すぐに手を離すと、アズが頬を抑えながら涙目になって文句を言ってきた。

「痛い……ひどいよラース……」

どうやら悪魔でも物理的な痛みは感じるようだ。

しかし戦うことになったときは危ない。こっちは武器や術を行使しないと彼らを攻撃できないが、彼らはわざわざ反撃しようとしなくても、ちゃんと触るだけでこっちを迎撃できるのだ。

……不公平すぎる。

「ごめん。でもこれで俺たちが圧倒的に不利だって分かったよ。」

何とはなしにアズの肩にぽんと手を置いた。

「ッ!？」

その瞬間、皮膚がそのまま張りつくかのような熱く鋭い激痛が俺を突き刺した。

思わず手首を抑えその場に座り込んでしまう。

「ぐ……っ」

「嫌な音した！ ラース!？」

アズが身体が触れないように気を付けつつ心配そうに覗き込んでくる。

平気だ、と声をかけたいが唇から漏れるのは呻き声ばかりで言葉にならない。

アズの声も少し遠くに聞こえる。

ああ、俺何やってんだろ。

このままだと、きっとアズが泣いてしまう。

体を丸め眉間に皺を寄せ痺れるような痛みに耐えていると、凜とした気配が近付いてきた。

「ラース？」

「サファ……」

掛けられた声に反応して顔を上げるとサファが立っていた。

これはまずい。

「……またあなたは悪魔なんかと……どうしました？」

「あ……いや……ちょっと水脈探してたら源泉にあたっちゃって」

「意味が分かりません。見せなさい」

アズを横目に見つつしどろもどろに言い訳をする。

しかし急に良い言い訳なんか思いつかないわ右手は相変わらずズキズキ痛いわけで、やっと思いついたものも意味不明すぎてサファに伝わらない。サファどこるか誰にも伝わらない。

そんな俺が隠すように庇っていた右腕をサファがぐいと引っ張った。

「ラ……ラースに乱暴しないで！」

「……！ この傷は……貴方、悪魔に触れましたね」

「え……あ、その……」

「そこの悪魔ですね」

アズの声を見無視し、爛れた右手を見たサファは一度顔を歪め、そして冷ややかにアズを睨んだ。

あ、サファめちゃくちゃ怒ってる。長いこと一緒にいたけど、今までにこんな声聞いたことない。

アズはその剣幕に若干怯んだようだが、負けじとサファを睨み返している。

「貴方がラースを」

「違うって、俺が触ったんだよ。アズは悪くな……」

「ラースは黙ってなさい」

冷淡な声でピシヤリと言われ、それ以上何も言えなくなる。睨み合う二人を前に俺はどうすることもできなかった。

っていつか俺の手については……

「ラース大丈夫？ ラ……」

俺の様子が気になるのか、アズがこっちを向いて不安そうに尋ねる。

それに対して俺が答えようとして――

――その瞬間、黒衣がアズを包み込んだ。

やはり今日もエルはどこかでアズの様子を窺っていたに違いない。エルは鼻を鳴らしてサファに蔑むような目を向けた。

「純真でなくとも天使が我等の魔力にあてられれば耐え切れないのは当然のこと。教育が足りないんじゃないのか？ サファエル」

「エルブランカ」ルーシュ……！」

「その名を呼ぶな」

「貴方こそ」

いつものように突然現れたエルに、サファは一瞬表情を硬くする。しかしすぐに一層きつく忌々しげにその悪魔を睨み付けた。一瞬何か違和感を覚えたが、右手の痛みがそれをかき消す。

まるでサファのことなど気にもとめていないかのように、エルは自らの腕の中にいるアズに話しかけた。

「ケガは無いな」

「俺は大丈夫……でもラースが」

「いい勉強になったろう」

「エル……」

「俺は先に教えてやったな？」

「……うん……」

そのエルの喋り方は有無を言わせない。でも確かにそうだ。アズは俺を止めようとした。

それを無視した結果がこれだ。
灼け爛れた右手が疼く。

サファはサファでやはりエルのことなどもう眼中に無いというように俺を見た。

「帰りましょう。穢れを早く治療しないと……一人で飛べますか？」

「飛べる……けどちょっと待って。アズ、気にしないでね」

振り返って、黒衣に包まれたアズに言う。

「ラース……」

頼りなげな声が聞こえたが、そこにはすでに二人の姿は無かった。

今までだって些細なケンカなら何度かした。

俺が無神経なこと言って、アズが怒ったり。

俺の悪戯にアズが怒ったり。

俺の……俺ばかりだな。

そりゃ俺だってたまにはアズにイラツとくることだってあった。
本気で怒ったことは無いけど。

普通のケンカなら反省して謝れば済む話だ。

アズの怒りもそんなに長くは続かない。

今までもケンカする度に仲直りしてきた。

ああ、一度だけ長引いたこともあったっけ。それでも最後には仲直りできた。

でも、

こんなふうに傷つけた場合の対処法なんて分からない。

…
…
…
…

天使たちの本拠地——“白の聖堂”に戻ると、怪我の具合を心配するサファと別れ治癒室に向かった。

廊下の両側に等間隔で並ぶ支柱の間に壁はなく、すぐに外に出られるようになっていた。支柱や天井には巧緻な細工（こしち）が施されていて見る者を飽きさせない。

やわらかな陽射しがそれらを優しく包み込みキラキラと輝いていた。

廊下を曲がると一番奥に威圧感を感じさせないクリーム色の扉が現れる。

俺は左手で申し訳程度にノックしてからそれを開けた。

「いらつしゃい。サファから連絡は受けてるよ。悪魔に触ったって？　とりあえずそこに」

座って、と背もたれの無い白くて小さな丸い椅子を指差すのは治癒専門の天使・ウイノ。

長い金髪を頭の高いところで一つに結び、ポケットがたくさんついた服を着ている。ポケットにはペンやピンセットやルーペ、果ては何に使うのかわからないが香辛料の入った小瓶まで詰まっていた。治癒専門と言ってもウイノは主に薬の研究をしていて、いつもなら別の天使が治癒にあたるのだが、あいにく今日は出払っているらしい。

俺はその椅子に座り自分の右手が細めの聖布で（包帯みたいなものだ）ぐるぐる巻きになっていくのを黙って見ていた。

聖布が傷に擦れる感覚が地味に痛い。

それが顔に出ているのか、時折ウィノが「ごめんね、もう少しだから我慢してね」と優しく言ってくる。優しく言ってくるがその手の勢いを緩める気は無いらしい。痛い。

「俺がここに出てんのもそうだけどさ……、しかし珍しいねえ、ラースがここに来るなんて」

「……」

「随分やんちゃなことしたねえ……痛かっただろ」

確かに痛かった。

けど。

アズの方がずっと。

俺が返事をしないでいると、その後ウィノは黙って治癒を続けた。

「——はい、これで終わり。しばらく右手には何も触れさせないよ
うにね。ご飯食べるときも左で。ラース右利きだよね？」

「うん。ありがとうウィノ」

軽く頭を下げてからドアに向かう。

すると俺の背中に向かってウィノが話しかけてきた。

「あれ、何か用事でもあるの？」

「別に無いけど」

「これからお茶にするんだけど。よかつたらラースも一緒に」

「……」

用事はない。無いけどなんとなく一人になりたかった。

しかし振り返ってウイノの穏やかな表情を見ると、俺はそれに吸い寄せられるように椅子に戻った。

「これこの前貰ったんだ。美味しいよ」

はい、と香茶の入った薄桃色のカップを渡される。

香茶とは読んで字のごとく芳醇な香りのするお茶だ。その香りの種類は多岐にわたる。

かぐわしい香りが鼻をくすぐる。ゆつくりと口に含むと、甘さの中に少しのほろ苦さを含んだ花の香りが広がった。苦いのは嫌いじゃないしむしろ好きだけど、これは少し苦手な苦さだ。

……それにしても左手だと持ちづらい。

俺が香茶を飲んだのを見てから、ウイノも香りを楽しむように目を閉じて口を付けた。

「うん、やっぱり美味しい」

「……ちょっと苦くない？」

「それが良いんじゃないか。ラースもまだまだ子供だねえ」

「……」

苦いの全般が嫌いなんじゃなくてこれが苦手なだけだ。

俺は何も言い返さなかったが、それを拗ねたと思ったのかウイノはクスクスと楽しそうに笑った。

それから深緑色の目を幾らか細め真つすぐに俺を見た。

「ねえ、ラース？」

「何？」

「君、忘れていたんだろう？ 黒の者に手を触れてはならないってこと。幼い頃に一番最初に習うことだ」

「……習ったつけ」

そんなこと言われたかな。そういえば小さい頃のこととかよく覚えてない。

「ああ、でも君の場合はサファか……サファなら触ってはいけなとか言ってなさそうだな。頑なに近付くな、としか言わなかったかもしれないなあ。まあ彼が言ってもあまり……ま、それはいいか。とにかく駄目だよ。いくら友達だと言っても、俺たちと黒の者は絶対に相容れないんだから」

確かに黒の領域や悪魔に近付くなどは毎日のように言われたし、言われている。多分これからも言われるだろう。サファは俺の耳で一体何匹のタコを量産するつもりなんだろうか。

持ったままだったカップに視線を落とし香茶を一口すする。さっ

きよりも少し冷めた、やはり慣れない甘くてほろ苦い味が伝わってくる。

……ん？　つか俺悪魔の友達がいるなんて言っただけ？
顔を上げてウイノを見ると、すべてお見通しといった表情をしていた。

「んーまあ、オトコの勘？」

「……。」

本気なのか冗談なのかわからない発言。
ウイノと話すときはいつもこうだ。

それからウイノは、んん、と伸びをした。パキパキと間接が鳴る音がする。

さすが万年デスクワーク、体のあらゆる部分が相当凝っているみたいだ。聞けば薬の研究に没頭するあまり飲まず食わずで三日以上経っていたこともあるらしい。……他人の治癒の前に自分を治癒した方がよくないか。

「ま・詳しくは聞かないし、他の誰にも言っつもり無いけど。あまり危ないことはするなよ」

「うん。……ところで、絶対に黒とは相容れらんないわけ。何か方法とかないの」

一旦頷きを返した後、今俺にとって一番重要で一番聞きたかったことを聞いた。

……返事が返ってこないんだけど、何その顔。鳩が豆鉄砲くらっ

たような、ってこういう時に使うのか。

「……無表情で何を言い出すのかと思ったよ。本当に君は表情筋が発達して無いねえ。せめて疑問符ぐらいつけたらどうよ」

少し呆れたようにウイノがさらりと失礼なことを言う。

無表情じゃなくてポーカーフェイスだ。そっちの方がなんかかっこいい。

「で、本当に方法は無いの？」

「まあ、無いね。光と闇は表裏一体のものだけど、交わることは有り得ない。そんな感じ、って言って分かる？」

「……なんかよく分からないような……でもなんとなくイメージ的には分かったような？」

「どっちだ。とりあえずどうして天使が悪魔に触れられないのか説明しておこうか。ラーズにも分かるようにね」

そして静かに話し始めた。

「白の者が黒の領域に入れないのは、黒の領域に充滿している瘴気に身体が拒否反応を起こすからっていうのは知ってるよね」

それは知っている。

俺が頷いたのを見てから、ウイノは先を続けた。

「よかった。つまりね、俺たちの身体は言わば聖気の塊なんだよ。」

黒の者は瘴気のね。で、聖気と瘴気つてのは普通同じだけの力を持つてる。勿論偉くなればなるほどその力は強くなるけど、とりあえずそれは置いといて。ここでは同レベルの天使と悪魔の場合で考えて欲しい」

同じだけの力？ 力のバランスが同じということだろうか。でもそれなら、

「でも力が均等なら、悪魔に触ってもこんな風にならない？」

瘴気の塊に触れて灼け爛れてしまった右手を見る。

あいからわず微弱な疼痛はあるが、先程よりは幾分マシになってきていた。

ウイノは頷きながら答えた。

「当然の質問だね。でも聖気の塊である天使が瘴気の塊に触るのは、身体にもものすごい負荷が掛かるんだ。俺たちの身体は身体内部でそれを処理しようとするんだけど、それが追いつかないくらいの負荷が掛かるから、表面にその影響が出てくる。つまりそうなる」

俺の右手を見ながら言う。

「そうしたら悪魔には負荷が掛からないのかって思うよね。悪魔にだって当然負荷は掛かってる。でも黒の者っていうのは白の者に比べてタフなんだよ。聖気を身体の外に排出するのが上手い。だからそうならない」

その視線は右手を捉えたままだ。

なんとなくそれから逃れるように左手で右手を庇うと、ウイノも

視線を外した。

「……それって不公平だよね」

「そうかもね。もちろん白の者の方が勝れているところもあるよ、精神力とかね。それにいくらタフだと言っても限界がある。下つぱの悪魔が身の程も知らずに強い力を持った天使に触れれば消滅することだってあるさ。それ以外で黒の者に対抗するなら、聖水を浴びせてやればいい。溶けるから」

別に何も変なことは言っていない、というように微笑みながら言った。

えーと、ここまでの話を整理すると。

白の者（天使や聖獣とか）は聖気の塊。

黒の者（悪魔や魔獣とか）は瘴気の塊。

白の者と黒の者が触れ合うとお互いダメージを受ける。

その度合いは両者の力が同程度なら白の者の方が酷い。

でもそれは黒の者がダメージを与えているというより白の者が勝手に自爆してる感じ。

ただし強い力を持った天使と低レベルの悪魔だったら悪魔の方がやばい。

で、黒の者に同じようなダメージを与えるなら聖水を使う。

こんな感じか。

あれ、何で聖気の塊に触っても大丈夫なのに聖水なら効くんのだ？

ウイノに尋ねると、それはね、と教えてくれた。すっかり先生だ。「水っていうものは自然の状態にあっても元々ある程度淨いものだからね。聖水はそれが更に淨められたものだから強い聖力を持つんだよ。だからじゃないかな？ ……」

俺はウイノが文末に小さく「多分」とつけたのを聞き逃さなかった。

「なんとなくうつすらわかったような気がしなくもない。ありがとうウイノ」

「理解が薄いなあ……俺の力不足かな。どういたしまして。また何か知りたくなったらおいで、美味しい香茶用意して待ってるから」
「いない」

肩を震わせているウイノにあの微妙な味のお茶を押しつけ治癒室を出た。

仕事も中止だしこれからどうしようか。
サファにはなんとなく会いたくない。

とりあえず白の領域から出よう。かといって灰の領域にも行きたくない。必然的に俺の足は人間界に向いた。

気付くと最早行きつけになってきた清の高校に来ていた。

一瞬どうしようか迷ったが、せつかくここまで来たので清に会っていくことにした。

三階、左端の教室。

窓際の席に清が座っていた。

四十人近い制服姿の男女が板書したり教師の話に耳を傾けたりあるいは寝ていたり、各々好きな形で授業を受けている。もちろん清は真面目に話を聞いている数少ない一人だ。

窓の側まで近寄ってみる

清がこちらに気付く気配はない。

どうしようかな。このまま飛んでるのも疲れるし。

あ、目が合った。

清は一瞬ビクツとして「俺は何も見なかった」という感じで目を逸らしたが、俺が見続けているといたたまれなくなったのか観念したようにこっちを見た。

「屋上で待ってる」

上の方を指差し口パクで合図する。

「わかった」と清も小さく口を動かしたので、俺は一人屋上へ向かった。

羽を消して可視状態になり、屋上のご真ん中を陣取って両手を頭の下で組んで寝転ぶ。

これならもし清との会合を誰かに見られても、とりあえず清が一人でしゃべっている危ない人には見えないだろう。なんという氣遣い。

見上げた空は太陽こそ出ているものの雲が多かった。

アズと真面目にケンカしたときはもつと雨が降りそうな雲が出てたっけな。

俺は目を閉じるとその時のことを思い返した。

…
…
…
…

「え？ 契約が終わったとき？」

灰の領域の大樹の上。

適当な枝に二人で並んで座る。左隣に座るアズがこっちを見上げていた。柔らかそうな髪に木の葉がついていてアクセントみたいになっっている。いつそれに気付くだろうかと思い、あえてアズには教えなかった。

「うん。悪魔の契約って願いと魂の交換して終わりでしょ。魂どうやって取るの。引っこ抜くの？」

これは以前から疑問に思っていたことだ。

サファも他の人も詳しくは教えてくれなかった。「貴方には関係ありません」とか「知らなくて良いことだ」とか言われたけど、そう言われると余計に知りたくなるのは種族関係無しに共通だと思う。

アズならもしかしたら教えてくれるかと思った。

しかしアズはしばらく焦ったように目を泳がせて俺から目を逸らし、

「うー……それは教えられないよ」

と言った。

「何で？」

「規則だから……」

規則なんてあるのか。契約者同士以外は知っちゃダメってことなのか？　なんかむかつくな、それ。

口籠るアズを何も言わずにじっと見ていると段々声が小さくなっていた。

「だ……っだめだよ……」

伏し目がちに発したその声は、弱々しく頼りなげなものだった。なんかこれって。

「そのセリフなんかエロい」

「エ……！？　そんなことないだろっ」

俺のまさかの発言にアズはショックを受けたようであんなと体を震わせた。

いや、でも正直に感想述べただけだし。

「ラースがエロいからそんなふうに聞こえるんだろ」

「悪魔ほど性欲強くないよ」

「天使がエロいとか性欲とかゆうなっ」

アズは恥ずかしかったのかそういう会話に慣れていないのか顔を赤らめた。

それにしても第三者が聞くとどっちが悪魔なのかよくわからなくなる会話だ。ここは普通、天使が^{おれ}恥ずかしがるべき場面なんじゃないだろうか。

「天使だって普通に性欲くらいあるでしょ」

「あるの!？」

「ないの？」

「ないって習ったのに……」

「じゃあない」

「どっちだよ」

その内容はちょっとアレだけど、他愛ない会話。

人間界で遊んだり魔法界に侵入したり妖精捕まえて遊ぶのも楽しいけど、アズとこうしているのが一番楽しい。ずっとこうしていられればいいと思う。

しかしこの後ミスった。

「あるにはあるけどめっちゃ薄いんだよ確か。悪魔の性欲が百なら天使のは五くらいだったはず。例えば好きな人とキスしたいって思うのも性欲のうちでしょ。その程度」

“墮落”と“淫欲”に飲まれるな、悪魔はその僅かな隙にすら付け入ってくる、ってサファか誰かに聞いたような覚えがある。……なんか俺の知識って「ような」ばかりだな。そのうち勉強しとこ。

俺のあやふやな発言を聞いて、アズはそんなの信じられないといった表情になり、身を乗り出してきた。

「薄っす！ ラースもそんな感じなの？」

「多分そうなんじゃないの。ていうかそんなこと今まで考えたことないけど。アズはあるの？」

「悪魔は小さい頃から性について学ぶんだよ。誘惑するのも立派な仕事だからね」

アズは人差し指を立て首を少し傾げすました様子で答えた。
しかし言ってることと普段のアズの言動が全く結び付かず、思わず吹き出してしまった。

「誘惑……アズが……？」

「なんで笑ってんだよ！」

「だってアズが誘惑って……ちゃんとできんの？　っと」

笑い過ぎて木から落ちそうになった。とつさに枝を両手で掴み体勢を立て直す。横ではアズができるよ！　と頬をふくらませた。

「強がらなくていいよ」

「強がってないっ」

「じゃあちよつとやってみてよ」

その言葉にアズは「えっ」と声を詰まらせた。

「ちよつとって……ラースに？　無理！」

「やっぱりできないんだ」

挑発するように言うと、アズはぷいと横を向いた。

「天使にしてもしょうがないし、ラース笑っただけじゃん」

口調は刺々しく口は尖っている。俺はよく分かってるなと思い、「アズに誘惑なんて無理でしょ」と言った。アズの頬は更にふくれた。

それを覗き込もうとすると、アズは意地でも見せないというように体を擦った。

「……あれ、怒った？」

「俺、仕事バカにされんの大嫌いだから。ラースといたくない」

そう言うつと羽を伸ばし枝から降りていった。しまったと思いその後を追うと、静かに「来ないでよ」と言われた。

いつもの怒り方とは違う淡々とした喋り方は不快感を露わにしている。

言い訳はせずに、まず謝った。

「ごめん」

調子に乗りすぎてしまった。誰にでもバカにされて許せない部分はあるのに。アズの場合はそれが仕事だった。ていうかアズは仕事熱心だし少し考えれば分かるだろ、数分前の俺。

アズは押し黙ったまま立ち止まっている。

「ごめん、無神経だった」

「……そうだよ、無神経だよ」

「……ごめん」

「……もういいよ」

俺の方を見ずに言った。僅かな怒気を孕んだ声に、少し戸惑う。その後どう言葉が続けばいいのか分からなくなってしまつと、アズもそのまま口を閉ざして、しばらく沈黙が二人を包んだ。

それに耐え切れなくなつて少し距離を取る。するとアズはゆっく

りと顔をこちらに向けたが、その瞳は俺を捉えていないようだった。それからぼつりと「今日は帰る」と言った。

俺はもう一度謝ったが、アズは何も言わなかった。

「またね」も「また明日」も言わずに別れたのはこれが初めてだった。

それから一週間は顔を見ない日が続いた。仕事が終わるタイミングが合わなかったようで、それが偶々だったのか避けられていたのかは分からない。

仕事終わりに、アズの待たないいつもの大樹へと向かう。

適当な枝に座ってしばらくぼーっとして、暗くなってきたら帰る。これが最近の日課だった。だから今日もそうするつもりでいた。

そしてそこに着くと、俺の心臓は飛び跳ねた。あ、と小さく驚きの声が漏れた。

樹の上に、紅い後ろ姿を見たのだ。

（――アズだ……）

一瞬足が止まる。しかしすぐに傍まで行き、できるだけ自然にアズの右横に座った。

不意に影ができて、何だ？という感じでアズが右を向く。そして目を軽く見開いた。

「ラース……」

俺はとっさに謝ろうとしたが、少し考えてやめた。いきなり謝罪の言葉を列ねても、何だかそれがひどく軽いものになってしまうよ

うな気がしたからだ。それにアズからは「もういい」と言われている。

アズから視線を外し、やや黒く曇った空を見上げた。

そして代わりに、

「つまんなかった」

正直に、

「え？」

「アズいなかったから、つまんなかった」

ここ数日思っていたことを言った。

一日二日なら会えないこともあったが、一週間以上も顔を合わせないなんて初めてだった。日常生活がなんだかとても平坦なものになった気がして、何をして今ひとつだった。いつの間にか、アズは俺の中に深く浸透していたらしい。

アズはしばらく無言で俺を見つめていたが、やがて同じように空を見た。

「……うん、俺も」

それきりアズは何も言わなかったので、俺はまたアズを見て口を開いた。

「もうあんなこと言わない。だから、また仲良くして欲しい」

息が詰まりそうになる。俺が持てる、精一杯の言葉を告げる。

「……うん」

アズは俯いて応えた。その横顔は、小さく微笑^{わい}ったような気がした。

ほっと胸を撫で下ろす。ふと気がつくと、自分でも気付かないうちに結構緊張していたようで、手のひらには汗が滲んでいた。

その後何とはなしに前を見ていると、小さくて茶色い鳥が一羽、目の前を横切っていた。ずっと前に下界で食べて美味しかったのを思い出して、焼き鳥食べたいなと呟く。

アズが「焼き鳥!？」と震えだしたので何事かと思った。誤解を解くのに苦労した。下界の焼き鳥は、生きたまま鳥を炙り殺し、頭から喰らいつく類の物ではない。

… … …

「……ス……い……ラース？」

目を開けると、清が俺を覗き込んでいた。その薄茶色の髪が柑子色いろの陽にあたって照り映えている。

どうやらいつの間にか寝入っていたらしい。

「ああ……ごめん、寝てた」

まだくつつきたがる臉を擦りながら体を起こす。

雲はまだ少しあるものの晴れていて、すでに日は傾きかけていた。

「どうしたんだ？」

「暇だったから遊びに来た。言い付け守ったよ。褒めてつかわせ」

フツと笑って、偉そうにすんなというツツコミを待った。

「言いたくないならいいけど……何でそんなに落ち込んでるんだ？」

清は、鋭かった。

「……気になる？」

なんだか真面目に向き合うのが気恥ずかしくて冗談めかしてそう言つと、清は何も言わずにただ真剣な眼差しを返してきた。

その瞳からは、からかってやろつとか興味本位とかそういうものは感じられない。

この男になら言つても良いだろうか。

清は俺と向かい合つて座り、俺が口を開くのを待っているようだった。

俺は一度窺うように清を見てから今までに何があつたかを話した。

アズに悪魔と天使は仲良くなれないと言われたこと、試してみようとアズに触つて怪我したこと、それできつとアズを傷つけたこと、ウイノに教わつたこと、天界に居辛くてここへ来たこと。

端折れるところは端折りながら、順番に話していく。清は最後まで黙つて話を聞いて、それから二つ三つ、理解しきれなかったことを質問してきた。俺はそれにできるだけ分かりやすく答えた。

清は茶化したりせず聞いてくれた。それだけで少し気が楽になる。

「そっか……」

そして清はおもむろに口を開いた。

「それ、ついさっきのことだよな？」

俺はうん、と声に出しながら頷く。

「そうだな……、とにかく、会ったのを怖がったら駄目だよ」

「え？」

「多分、次に会うときはすごく怖いと思う。だけどそこで逃げたらその次はもっと怖くなるから。アズから逃げ続けたくなんかないだろ？」

それはその通りだ。

分かってる。

分かってるけど、次に会って拒絶されたら。また傷つけたら？

目を伏せて、アズを思い浮べる。そうして浮かんだ顔は、泣きそうになるのを堪えてサファを睨むものだった。

ああ、そうだ。泣き顔を見るのは嫌だな。

「でも、どんな顔して会えば良いのか分かんない」

俺は今、多分自分史上最大に行き詰まってるから、「でも」や「だって」が先立ってどうしようもない。

瞼の向こう側で、清のやわらかな栗色の双眸がふわりと細まった気がした。

「それはアズも同じ気持ちだと思うよ」

「……そうかな」

言葉の代わりに清の手が俺の頭を優しく撫でた。

子供扱いされてるような気もするけど、今はそれでも心地好い。顔を上げると目が合って、髪を撫でながら清は言った。

「それに、ラースが逃げたらアズはもつと傷つくだろ？」

「……そうかも」

確かにここで俺がアズを避けたら、アズはもつと自分を責めるかもしれない。そんなのはダメだ。

聖布に包まれた傷がちりちりと痛んだ。

「……けど、さすがに今すぐは会えない。こんなだし」

自分が情けなくて。

それを聞いた清は片方の眉尻を下げ、困ったように笑った。

「それはそうだろ。……今すぐなんて言わないよ。ラースが会いたくなったらでいいんじゃないか？」

「それで大丈夫かな」

「大丈夫」

自分でもちよつとびっくりするくらい不安げな声が出たが、清がそれをかき消すように優しく、力強く言ってくれたおかげで、俺もやっと笑顔を浮かべることが出来た。まあ、ウイノに言わせたら普段とそんなに変わらない顔なんだろうけど。

沈みかけの夕陽が雲の隙間から見えた。

鮮やかなオレンジ色が辺りを覆うなか、頭上をツバメが二羽飛んでいった。高い位置だから、きっと明日は晴れるだろう。

次にアズに会ったら、まず何て声をかけようか。

やっぱりいつも通り行くべきかな。
それとも。

そんなことをぼんやり考えていたら、いつの間にか陽は沈んでいた。

期待通りの快晴だった。燦々^{さんさん}と降り注ぐ太陽の光が気持ちいい。こんな日はふかふかした雲の上でごろごろするのが一番良い過ごし方だ。

しかし今日はその前にやらなければならないことがある。俺はそのためにちよつとした準備をしてから灰の領域へ向かった。

あれから六日経ち、右手には未だ若干の違和感はあるものの痛みは大分薄らいだ。

それに比例するように、アズに避けられたらどうしようという気持ちよりも、アズに会いたい気持ちの方が随分強くなった。

実は三日前くらいからいつもの大樹でアズが来るのを待っていたのだが、日が暮れてもおやつを用意してもアズが現われる気配は一向になかった。なんかもう避けられてる感満載なんだけどそっちが来ないならこっちから行くことにしたのだ。

灰の領域のど真ん中にある大樹を越えて、黒の領域に近づいていく。黒の領域はほとんど毎日、分厚い雲に覆われていて薄暗く、灰の領域でも黒の領域に近いところは仄暗い。

それまでは穏やかだった空気が、少しずつ冷たくて張り詰めたものになっていく。

その中をひとり、ひたすら飛び進む。辺りがすっかり仄暗くなつて、瘴気も濃くなってきた。

あるところは暗緑の木々が鬱蒼と茂り、あるところはゴツゴツした岩や砂しかない。姿が見えない何かの、薄気味悪い鳴き声が微かに聞こえる。もちろんサファから「ここから先へは行かないように」

と言われた場所はとくに通り過ぎていた。

白の者なら普通ならこの辺りまで来れば、まわりつく瘴気に気分が悪くなり先へ進めなくなってくる頃だろう。だけど俺には余裕だった。ちつとも体調を崩す心配がない。まだまだ奥へ進めそうだなんでだろう？ いつも悪魔と一緒^{アス}に過ごしているから、瘴気への耐性でもついたんだろうか。多分そうだな。

しかしあまり奥に行きすぎて、魔獣や見知らぬ悪魔に遭遇するのは避けたい。めんどくさいし。

近くにアズがいるといいんだけどな。

こういうときは携帯が欲しくなる。以前下界に遊びに行ったときに立ち寄ったケータイショップで衝動買いしそうになったが、天界に電波が届くわけないことに気付いて諦めた。そもそも届いたとしても、アズには携帯なんて使いこなせるはずがない。せいぜい糸電話がいいところだ。

こんなところを天使が飛んでいると目立つだろうから、俺はとりあえず地に降り立った。ここからは歩いて行く。何かあったときにすぐ逃げられるように、羽は出したままだ。

枯草を踏み、乾いた音を立てながら歩く。それが心地よくてちょっと楽しい。

少し触れただけで肉や骨を切り裂く、葉の片側がナイフのように鋭く尖った草。

猛毒のガスを噴き出す泉。

甘く腐った果実のような匂いを出し、獲物を誘う食肉植物。

紅い髪が悪魔。

どれも白の領域には無いものばかりで、あちこちに目を奪われる。種族が違っただけで、棲み着く環境はこうも違うのか。このおどろおどろしい雰囲気も、天使が悪魔を毛嫌いする要因の一つかもしれない。

……紅い髪が悪魔？

「ラース！？ 何でこんなところに？ 手は……っ」

見間違いかと思ったがそうではなかった。多分向こうも同じ気持ちだろう。いるはずのない俺を見て目を丸くしたアズが駆け寄ってきて、微妙な距離を開けて前に立った。

うん、たまにはこう都合よく話が進むのも悪くない。

「いつものところで待ってたけどアズが来ないから会いに来た」

「あう……だつて……ていうか平気なの？ ううんそれより手は……」

アズはばつが悪そうに目を逸らしたあと、すぐにまた俺を見つめ、続け様に質問してきた。

「ああ……こんな」

右手の手のひらがよく見えるようにアズの目の前に突き出す。手首から先がぐずぐずに爛れてどす黒く変色し、今にも腐り落ちそうになっている。それを見たアズは眉間に皺を寄せ顔を歪めた。

「……っ」

……ちよつとやりすぎたか。

「嘘」

「え？」

俺は右手にはめていた少し大きめのゴム製の手袋を外すと、そのままアズに投げた。

アズは俺の手から手袋がずりりと剥離した瞬間に、ひっと短く悲鳴をあげて顔面蒼白になった。

「うわっ！ なな何！？」

「騙された」

「え……っ」

このグロテスクな手袋は、ずっと前に手に入れた方がいいが使い道がわからず持て余していたものだ。アズはそれを抱き抱えたまま、聖布でぐるぐる巻きの俺の右手を見た。

俺もつられて右手を一瞥する。

「このくらいすぐに治るよ」

「うそ……悪魔と触れ合った傷は治りが遅いって……」

眉を八の字にしてそう言いながら、じりじりと後退していく。微妙な距離はさらに開いた。

「……何この距離感 こっち来れば」

「そんな滅相もない!!」

「意味わかんない」

おいで、と手招くとアズは一瞬ほわつと嬉しそうな顔をしたが、すぐにはつとした様子でふるふると顔を横に振った。

来い来い作戦は失敗したようだ。

じつと見つめるとアズは焦って下を向き、それならと近付くときと後ろに下がった。

「……だめだよライス……」

やはりアズは気にしているようだ。それも思った以上に。

なるべくいつも通りに、何事もなかったかのように振る舞おうと思ったが、それも難しそうだ。

……アズが悪いわけじゃないのに。

気にすることない。悪いのは面白がった俺なんだから。

「あ……ライス……?」

なぜかアズは急におろおろし始めた。

「え、何」

「だってライスが寂しそうな顔するから……」

「……え」

思わず頬を触ってみるが別段いつもと変わりはない。

寂しそうな顔ってどんなだ？ 大体アズの方がよっぽどそういう顔してる。

アズは大きな二つの瞳でまじまじと俺を見つめてきた。

そんなに見られるとなんだか背中がむず痒くなってくる。

ふと、向かって右奥に生えているちよつと背の低い木に、熟れた赤い実がたくさんなっているのに気がついた。

きつとあれを食べればアズも少しは元気が出るだろう。食い意地はってるし。

それをもいで来ようと飛び立つと、途端にアズが前に立ち塞がった。それも3メートルくらい前に。

「い……行っちゃうの？」

「……この距離がある限り？」

別に帰ろうとしたわけではない。しかし距離を置くアズになぜか苛立ちにも似た感覚を覚え、なんとなく意地悪を言ってみた。

するとアズは悲しそうに目を伏せた。

「だって俺……俺だってもっとそばにいきたいし……」

静かに言葉を続ける。

「なんか……触れないと思ったたら触りたくなるし……」

その瞳は涙でじわりと潤み、もう少しで悲しみが零れてしまいそうだった。

「でも俺が触ったら傷つけるし……っ」

例えばサファの腕に掴まるように、例えば犬猫を撫でるように。

触れたら。

触れるなら、アズが泣いても涙を拭ってやれるのに。

意地悪を言ってしまった自分に嫌気が差す。

頭をがりがり掻き、ため息をついた。

「……帰らないよ。ちよつとそこの木の実がおいしそうだったから」

「木の実？」

真っ赤に熟した木の実を指差すと、アズもそれを見た。その途端にアズは顔色を変えて叫ぶように言った。

「あつあれは絶対取っちゃだめ！ えつと……天使でも食べられるやつは……」

辺りをキョロキョロ見回す。そして葉が人の手みたいな形をした木に近寄り、その木からこぶし大の黄色くて丸い実をいくつかもぐと戻ってきた。

「あの実は取った瞬間に爆発しちゃうんだ。これなら大丈夫だから」

さらりと不穏なことを言いながら俺に木の実を手渡すと、また3メートルくらい前に離れた。

とりあえず渡された黄色の木の実をかじってみると、硬めの果肉はほんのり酸味がきいていて甘酸っぱい味がした。きっとアズはもっと甘ったるい味の方が好きなんだろうけど、これしかないならしょうがない。

木の実を手を持ち直すとアズの目の前まで近付き、そのままかけのそれをアズの口に突っ込んだ。

「むぐ!？」

「おいしい?」

アズが「何すんの!」と涙目で訴えてくる。しかし俺がそのまま動かず見ていると、口の中の果実をもぐもぐ咀嚼して飲み込んだ。

「ぶあ……。すっぱい」

アズは少し口をすぼめた後、唇に付いた果実の汁を舐め取った。俺はアズの唇から目を離すと自分の手のひらを見た。

手のひら。

手袋。

黄色い実。

……もしかして。

ちょっといいこと思いついたかもしんない。
やばい。早く試してみたい。

「明日仕事終わったらいつものところに来て」

「え？」

目をぱちくりさせているアズに残りの木の実を半分持たせる。

「絶対だよ」

「わ、分かった……？」

よく状況を飲み込めていないアズに念を押すと、そのまま白の領域に向かって飛び出した。

——うまくすれば、もしかしたらアズに触れられるかもしれない。

…
…
…
…

白の聖堂に戻ると、真つ先にエリーの部屋に向かった。
さっきの思い付きを実行するために。

「ラース、廊下は飛ばないようにね」

夢中で羽ばたいていると、後ろからやんわりと咎められた。振り
向くと、ルシードが立っていた。

「元気なのはいいんだけど」

微笑みながら言う。

天使たちの階級は一番上に神がいて、その下に神の側近、その下に八聖老と呼ばれる八人の天使たちがいる。“聖老”と言う名の通り皆じーさんだ。いやまあ元々“聖老”は老人って意味じゃないんだけど、今の八聖老はじーさん天使ばかりだ。八聖老は神に背かない限り、絶大な権限と行使力を持つ。

ルシードは次期八聖老は確実と言われている。
元サファ直属の上司でサファをみっちり鍛え上げ、現役の頃はよ

く下界で戦争が起ると収めに行っていたらしい。

今はいつも「自分はもう年を取った」とか「若い頃が懐かしい」とか言っている。実際年齢はじーさんに片足突っ込んでいるみたいだが、ルシードの見た目はとても若く、精々サファよりちょっと年上くらい？ と感じるほどだ。薄い茶色のような黄緑のような不思議な色合いの髪を肩ぐらいで揃えていて、いつも腰には翡翠のついた短剣を差している。

ちなみにルシードの下の下らへんにサファが属する階級があつて、その下の下の下の下の下らへんに俺がいる。端くれ天使だ。

「ルシードこそこんなところで何してんの」

そんな雲の上の存在のような天使相手にタメ口をきくのは俺くらいだろう。

前にサファから正しい言葉遣いをしなさいと怒られたような気もするが、気にしない。

「今日はいい天気だから外で精霊たちとお茶会しようと思って。ラースも来る？」

ほら、とバスケットに入った細々したお菓子や果物を見せてくる。ほわーんと暢気な笑顔を浮かべるルシードからは、荒々しい戦争を平定させる姿は全く想像がつかない。しかしそれでも有事の際はとも頼りになるのだ。

それにしてもウイノといいルシードといいお茶好きが多いな。

「いい。今からエリーのところ行くんだ」

「エリーのところに？ 記録用のペンでも壊れたの？」

「うっん。ちょっと作って欲しいものがあるんだ。でもルシードには内緒」

人差し指を立てて唇にあてる。それを見てルシードは楽しそうにくすくす笑った。

「ふふ……、エリーは私と違って忙しいからね。あまり邪魔してはいけないよ」

「分かってるよ」

浮かれ気分のルシードと別れると、今度こそエリーの研究室ラボラトリーに向かった。また誰かに注意されるのは面倒なので、羽をしまつてちゃんと地に足をつけて歩いていく。

エリーは白の領域で唯一の発明家だ。いつも研究室にこもって何かを造っている。

その発明品は役に立つ物から何に使うのか分からない物まで様々だ。

いつだったか人間界で捨てられていたテレビを拾ってきたことがある。すぐにサファに見つかって没収されてしまったのだが、いつの間にか喋れて人型に変身もできるテレビに改造されていた。一体どういう原理なのかさっぱり分からない。ちなみにそのテレビ（？）は、普段は聖堂の中央広場に置かれている。たまに勝手に出歩いていることもある。

「エリー、いる？」

返事は無い。コンコンと軽くノックをしてからそつとドアを開けると、中から断続的な機械音が聞こえてきた。どうやらまた何か造っているらしい。エリーは一度発明に夢中になると周りの音が聞こえなくなってしまうから厄介だ。

仕方ないので床に散らかっている何かの部品を踏まないようにそつと歩き、エリーに近付く。それから肩をばんと叩いた。

「エリーってば」

手にしていた先端が尖っていて細長い器具の電源を切つて机の端に置くと、エリーはゴーグルを外してやれやれと言った感じでやつとこつちを向いた。

「作業中は入つてこないで欲しいんですけど……」

「そんなこと言ったら一生入れないじゃん」

エリーはふうと一息吐いて、椅子の背もたれに体重をのせた。年季の入った椅子がギシ、と軋んだ。

「作つてほしいものがあるんだけど」

誰も聞いてはいないと思うが、軽く辺りを見回してからエリーにこそつと耳打ちする。すると眉間に少し皺を寄せて俺を見た。

「……それを明日までに？ 急つすね」

「無理？」

「やってみるっすけど」

「やった。よろしく」

工作好きなエリーのことだからきつときつちり作り上げてくれるだろう。

これでは明日を待つだけだ。

親愛の意を込めてエリーの髪をくしゃりと撫でると、ほんの少し嫌そうな顔をした。

次の日。眠い目を擦りながら、仕事に行く前にエリーのところへ寄って頼んでいたものを受け取った。

皮のような素材でできた焦げ茶色の手袋。俺が昨日頼んだ通りに出来ているなら、これは防水・防火・防“気”性に優れ、外部の熱も臭いも遮断する。何かに触れた感触は伝わる。

手にはめて感覚を確かめると、外側は柔らかい皮の感触で、内側は子犬の毛並みのようにふわふわしていた。付け心地はきつくも緩くもなくちょうどいい。

急な頼みでもちゃんと仕上げてくれるなんて、さすがエリーだ。

「そんなもの何に使うんすか？」

手袋をはめた手を握ったり開いたりする俺に、エリーが不思議そうな顔で聞いてきた。

「エリーにも内緒」

昨日ルシードに答えたときと同じように人差し指を唇にあてて答える。エリーは特にそこまで気にならないのか、それ以上は聞いてこなかった。

… … …

「あ……ラース！ 遅かったね」

仕事をぱーっと終わらせて待ち合わせ場所に向かうと、すでにアズは来ていた。

俺と目が合うと、アズはぱあっと目を輝かせて近づいてきた。そしてやはり1・5メートルくらい前で止まった。

「またこの距離感……」

でも昨日より少しは縮んだか。

辺りを見回すと今日は珍しく、白の領域へ戻る途中なのであろう。天使たちが二、三人飛んでいく姿が見えた。ちよつと場所変えないとまずいかな。

「もう少し向こうの方行こう」

そう言いながら黒の領域の方向へ飛んでいく。
すると、

「え？ あっちょっと待ってよラーズ！」

後ろからアズの慌てた声が聞こえてきた。

「ねー、どこまで行くの？ あんまり行くと危ないよ」

飛び続けていると、辺りはうつすら暗くなり、だんだん瘴気も濃くなってきた。

確かに行きすぎるのもよくないな。それにもうそろそろ大丈夫だろっ。

下を見ると手頃な雲の塊があったので、俺はそれに向かって飛び降りた。

「あっもうラーズってば！ 降りるなら降りるって言ってよ！」

上からアズの慌てた声が聞こえてきた。

小さめの公園くらいの、ふかつとした真っ白な雲に降り立つ。が、勢い余ってバランスを崩し尻餅をついてしまった。でも雲だから痛くない。

雲を歩く感覚は、粉雪を踏む感覚に似ている。踏んだ瞬間はふわっとしていて、踏みしめるとむぎゅ、もぎゅと音が鳴る。

立ち上がったもぎゅもぎゅと雲を踏んでいると、アズがまた距離を取って前に降り立った。

「こんなとこで何するの？」

アズが小首を傾げてこっちを見た。

することは決まっている。

ここからだアズに届かないので、目の前まで近づく。

右手はまだ完治していないから、何かあったら怖いし今日は左手だけで。

アズの頭上に左手をかざすと、アズは反射的に目を閉じた。

そつと頭を撫でる。手袋越しにアズのやわらかい髪の毛の感触が伝わってきた。

——あの痛みはない。触れた……。

「え……？」

髪から手を離して、今度はアズの手を握る。

アズはおそろおそろ目を開くと、まず握られた自分の手を見て、それからゆっくりと視線を上動かしていった。俺と目が合うと、目をみはった。

「昨日のうちに作ってもらったんだ。頭いいでしょ」

手を離して、手袋をはめた手をアズの目の前に広げる。新品の皮の匂いが微かに鼻をくすぐった。

「うんっ……すげー……触ってもいい？」

アズが目を輝かせて、俺の顔と手袋を交互に見た。俺が頷くと、

まずちゃんちよんとつつくように触った。そして俺に何の異変も起きていないことを確かめてから、指を絡ませた。

「すごい……痛くないの？」

「全然」

もう片方の手で手袋を撫でながら、嬉しそうにすごいすごい、と繰り返す。

そんなアズが無性に可愛く見えた。

絡ませたままの手指を握り、そのまま顔を近づける。

「ん、……？」

触れあった瞬間、その乾いた唇からバシッと大きな痛みが伝わってきた。

「ッ」

瞬間、思わず手を解いてアズから離れる。

アズは目を軽く見開いてこっちを見ていたが、はっとした様子で慌てだした。

「ラース！ あ……」

「何してるんですか貴方は！」

大きな瞳でこっちを見続けているアズから顔を背け、手の甲で唇を覆う。

すると目の前に純白の天使が現れた。眉間には皺が寄り、ブロン

ドの髪が場違いなほどに美しくなびいている。俺は腕を掴まれて、その胸の中に抱き寄せられた。

「サファ……どうしてここに」

顔を上げて大丈夫、と手をひらひら振ってみせると、サファは安心したのか手を離れた。

ていうか今の見られたのか……。これは大変気まずい。

ちらつとサファの顔を見ると、青白かった。体調悪いのか？ と思ったが、そういえばここは黒の領域に近い場所だ。気を抜けばねっとりとした瘴気が体に絡みついてくる。強い聖気を纏うサファには、並の天使以上にきつく感じるだろう。俺は別に平気だけど。

「どうしてって……、貴方が黒に——」

つらそうに額を抑えたサファがそこまで言うと、身体がふらつとよろめき、そのまま倒れ落ちていった。

まずい、雲の下は骨をも噛み砕く茨だ。

「サファ！ ……ッ」

腕を思い切り伸ばす。指先はサファの腕をかすめたが、しかし右手に嫌な痛みが走り力が抜け、その手を掴むことができなかった。

「えっあつ助けなきゃ……っでも俺触れないしどうしよ……っ」

右手を抑え蹲る俺の横で、アズがおろおろしていた。

こんな止まってる場合じゃない。

そうこうしているうちにも、サファは重力に逆らわず落下していく。

下では茨が久々の獲物にぎらつき、舌舐めずりして待ち構えている。

いくら口づるさくてもサファに死なれたら困る。

痛みをごまかすように右手を握り締め、下に向かって飛び込んだ。しかし落下のスピードが速すぎる。

やばい、俺じゃ追い付けない――

風が起こった。何かが鼻先を掠めていった。

「あ……エル！」

アズのほっとした声が辺りに響く。

下を見ると、エルがサファを抱きとめていた。内容はよく聞こえないが、エルがサファに何か話しかけ、サファも口を動かしているのが見える。どうやら意識も戻ったようだ。

「あーよかった……」

柄にもなく安堵の声が漏れた。胸を撫で下ろしつつアズの元へ戻る。

アズはぼかんと口を開けて二人を見ていた。さつきからずっと目は見開かれたままだ。

「あれ？ 何で……」

ぼつりと呟く。

「アズ？」

「何で触れんの……？」

即座に振り向いて二人を見る。

サファが痛がっている様子はない。手袋とかをしているようでもない。むしろサファは甘えるように、エルの胸に顔を埋めている。

エルはサファの髪を愛おしそうに撫でていた。

「……なにこれ。」

アズはその空気に怯むことなく二人に近づいていった。

あれに割って入ろうだなんてすごいな。

そんなことを考えながら俺もその後を追い、アズの横に並んだ。

「エル……」

そしてアズがおずおずエルを見上げると、その凄艶な男は口端を上げ不適に笑った。

「これが私のものだからだよ」

そう言いながらサファの髪を一房掬い、その髪先に軽く口づける。

「な……違う……」

弱々しい抗議の声を上げたサファは、エルの両肩を掴み身体を起こそうとしたが、うまく力が入らなかったようで、またエルの胸にもたれかかった。

エルはサファをじっと見つめた後、俺を横目で見た。
一瞬、身が竦む。

「火遊びは止めて居るべき場所へ帰ったらどうだ」

それだけ言うと、サファを抱きかかえたまま白の領域の方に向かって飛び立った。

嫌い合ってるのかなんなのかよく分からなくなるな。なんなの。
ぼーっと考えているとアズが俺の左手をちよこつと摘んで見上げてきた。

「お……追っかけよ！」

頷きを返してからエルとサファの後を追った。アズも俺の横に並ぶ。その視線は二人をしっかりと捉えていた。

何か分かるかもしれない。

やっぱり悪魔に触れる方法があるんだ。

二人の声は聞こえないが、表情は読み取れるくらいの距離を置き、

追いつける。

エルはサファの耳元に顔を寄せ、何か囁いているようだった。それを受けてサファは、力無く額に手の甲をあてた。

……いいな。俺なんてやっと手袋越しに触れるようになったっていうのに。

ふと右手を見ると、少し血が滲んでいた。さっき無理に伸ばしたときに傷が開いたんだろう。またウイノに苦い顔されるかな。とりあえず、アズには見せないようにしておこう。余計な心配かけたくないし。

しばらく飛んで、灰の領域の大樹を通り過ぎると、エルは方向を変えて右に飛んでいった。まっすぐ飛べば白の領域なんてすぐなのに。何かあるのか？

俺とアズは顔を見合わせ、エルの後を追いつけた。

分厚い雲の塊を抜けると、ボロボロの神殿があつた。石の支柱の大きさから見て、大昔はきっと立派なものだつたのだろう。しかし今は崩れ落ちて無造作に転がっている。

澄んだ空気が、悪魔たち廃墟となつた神殿全体を覆つていた。こんな清浄なところ、アズやエルにはきつくはないのかと思つたが、二人とも大丈夫そうだ。アズは珍しそうに辺りをキョロキョロ見回している。エルにいたつては自分からここに来たのだ。別に何ともないんだろ

う。
それにしても、こんなところがあつたなんて知らなかつた。あまり人も来なそうだし、陽の光が差し込んで暖かそうだし、昼寝にはちょうどよさそうだ。

倒れた石柱の陰にアズと並んで隠れて、二人を見た。
廃神殿に降り立つたエルはサファを降ろした。もう体調も回復したみたいだ。顔色もさつきより全然良い。
サファは「すまない」と簡潔にお礼を言つと、複雑そうな顔でエルを見た。

「おつきいねー……二人とも」

アズが呟くように言った。何が？　と言おうとしたが、すぐに何かわかつたのでやめた。アズの視線はサファとエルの大きな六枚の羽に注がれていた。確かにあれはデカイ。

出しっぱなしのアズの羽を見る。あの二人に比べたら大分小さい。小さいなーと見たままの感想を言いながら羽を摘むと、「ラース

よりはでかいよ！」と羽をばたつかせた。

そんなアズはほっというてサファ達に視線を戻すと、エルがサファの頬を撫でていた。サファの表情は険しいまま見つめ合っている。さつきにも増して入りづらい空気だ。

「なんかあやしげ……」

隣からアズの独り言のような声が聞こえた。まったくその通りだと思う。

そしてエルはサファの顎を掴むと少し上に向かせて、そのまま唇を重ねた。

……え、マジで。

サファの顔はかっとなくなり、エルを突き放そうともがいていた。しかしエルに両手を片手でまとめて掴まれて、がっちりと腰を抱き寄せられているため逃れられない。

うわすごいな、と思いながらガン見していると、アズに左手をペシペシ叩かれた。地味に痛い。

アズを見るとこっちも頬を赤く染めていて、視線はもちろん二人に釘付けのまま体は小刻みに震えていた。気持ちは分からなくもないけどちょっと興奮しすぎ。

サファたちとアズどっちを観察しようか少し迷うけど、ここはやはりサファたちを見ておくのが筋だろう。

いつの間にかサファは抵抗するのを諦めていた。エルが唇を離すと力が抜けたのか、その場にへたりこみそうになる。それをエルが支えるように抱きとめると、サファはエルに力なくもたれかかった。

「すっすごいね……俺たちここにいてばれてないかな？」

アズは興奮冷めやらぬ様子で俺の服の裾を引っ張ってきた。

「どうかな。あんまり騒いでるとばれるかもよ。サファ地獄耳だから」

アズはさつと両手で口を覆いサファを見た。二人が俺らのことなんかまるで気付かずに会話を続けているのを確かめると、ほっと息を吐いて両手を外した。

それと同時に「からかうな！」とサファの叫び声が聞こえた。そのとき何でか分からないけど、さっきアズにキスしたことを急に思い出した。

そうだ。

なんか短時間に色々ありすぎてすっかり忘れてた。

——何やってんの俺……！

ありえないくない？

さっきまったくそんな雰囲気じゃなかったじゃん。

てゆーかアズもすごいスルーしてるけど忘れてるのかな。忘れてるだろうな。いつも三歩歩いただけで何しようとしてたか忘れてるし。そのまま忘れてほしい。

ぐるぐる頭の中で考えが飛び交う。とりあえずこっそりアズとの距離を開けた。

「ねえラー……あれっ？ 何でそんな離れてるの？」

「いや別に何でもないよ全然」

視線を泳がせて一気に言う。ちよつと早口になってしまった。なんか顔がじわじわ熱いような気がする。アズと目も合わせられない。

「えっ何！？ 何かついてる！？」

そう言いながら何もついていない頬を両手で拭っているのが目の端から見えた。

このままだとずっと拭い続けそうだ。

「いや、そーゆーわけじゃないけど……」

「じゃなに？」

ちらつとアズを見ると、動かし続けていた手を下に降ろし、不思議そうに俺を見ていた。

「本当に忘れたの？」

忘れててほしいとは思うものの、本当にきれいさっぱり忘れられるのは少し複雑だ。

しかもこんな短時間で。とかいう俺もついさっきまで忘れてたけどや。

アズは俺のすぐ前まで近寄ると、少し不安げな顔で見上げてきた。

「え……俺が何かした？」

違う。

首を横に振る。

「じゃラースが……あ」

石柱の残骸を見つめながら、むうと右手を顎にあててしばらく考え込んでいたようだ、どうやらやっと思いが当たったようで、慌ててまたこっちを向いた。

「あ、えつと、関係ないかもしれないけど……さっきなんで俺にキスしたの……？」

その頬は少し赤くなっていた。

照れているのか、それとも違ってたら恥ずかしいとかそういうあれだろうが。

俺もついさっき「忘れられるなんて複雑」とか思ったばかりだけど、……やっぱ思い出されると本当に恥ずかしい。こころこころ言っていること変わるけど、全部本当にそう思うんだから仕方ない。

しかし「なんで？」って言われても俺にだってなんであんなことしたのか分かんないんだから答えようがない。

なんていうか、しいて言えば。

「……ついつつかり……引き寄せられた？」

「……口に？」

軽く頷く。顔は見えない（つつか見れない）けど、アズがこっちをじっと見てるのは分かる。視線が痛いほど突き刺さってるから。やめて。

「ラースって変なんだね、意外……」

アズが呆れたふうでもなく、貶すわけでもなく、ただ感心したように言った。

心外だ。誰のせいだと思ってるんだ。

「アズに言われたくない」

「俺 唇に引き寄せられたことなんかないもん」

「俺だって……」

今までこんなことがなかった。誰彼構わず引き寄せられてたら、それはただの酔っ払いだ。

「……もう帰る」

「えっ、帰っちゃダメっ」

くるりとアズに背を向けると、ギュッと左手を掴まれた。またじわりと、顔が熱くなる。きつと俺史上最大級に赤くなっているに違いない。

どうにかしてアズの視線から逃れたいが、俺の手はしっかり掴まれたままで、アズが放してくれる気配はなさそうだ。

アズはどう思ったんだろう。拒絶されなかったのは、ただ驚いて抵抗するのを忘れただけなのか。

ああもう、穴があつたら入って引きこもりたい。ないなら掘るかスコップ貸してほしい。

「……何で拒否んないの」

いたたまれない。

嫌な汗が首筋を滑り落ちていく感触が気持ち悪い。

「え……先にバチッてなっちゃったし……」

「そうじゃなくて、今。気持ち悪くないの？」

あ、聞き方失敗した。ここで頷かれたらさすがにしばらく立ち直れない。

アズから目を逸らして下唇を軽く噛み、次の言葉を待った。

「気持ち悪くないよ」

「……え」

予想とかけ離れた返答に面食らってアズを見ると、きょとんとした様子でじつとこっちを見ていた。それからさらに逆に「なんで？」と尋ねられた。え、いやそれ俺のセリフじゃない？

「アズこそなんで？」

「え？　なんでって……」

『アズ いつまで話しているつもりだ』

「っ!？」

アズが言いかけたとき、突然エルの低い声が辺りに響いた。

俺とアズは文字どおり飛び跳ねて驚き、慌てて二人がいた方を見た。そこにはへたり込んだサファがいるだけで、いつの間にかエルは帰ってしまっていたらしい。全然気づかなかった。

「かか帰らないとっ」

「ん、気をつけてね」

ほっと胸を撫で下ろしてそう言うと、アズはうん！と元気よく頷いて黒の領域の方へ帰っていった。

なんかうやむやになっちゃったけど仕方ない。多分あれ以上は心臓がもたなかったと思うし。

アズの姿が雲で見えなくなると、未だ座り込んだままのサファの側へと寄った。

「サファ？ 帰ろうよ」

返事はない。大丈夫かな。

「サファってば」

「……ラース……帰りましょうか」

俺に気づくとサファはすつと立ち上がり、目だけが笑っていない
微笑みを顔に浮かべて言った。

どうしたっていうんだ。怖いよ。

サファは黒の領域の方角を一度きつく睨むと、険しい表情のまま
長い髪を翻し、白の領域へと飛び立った。

俺も置いていかれないように飛び立つ。

なんとなく神殿を振り返ると、その中央には、闇色の羽根が一枚
残されていた。

朝から少し雲がある日だった。今日は一日隠れたままかと思われた太陽が昼過ぎに顔を出すと、日差しは緩やかにその温度を高めていった。

俺はもっこもこな雲の上でうつ伏せに寝転び、ふかふかした天然のベッドに顔を埋めながらそれを全身に浴びていた。どこから鳥のさえずりが聞こえてくる。忙しく耳に入ってくる高い音が心地いい。姿は見えないが、近くの木にでもまとまっているのだろう。

今日は久々の休息日。普段の仕事の煩わしさから解放され、心から休める最高のホリデー……何だこの言い回し。とにかく、今日ばかりはひたすら惰眠を貪ろうがどこかに遊びに行こうが、誰にも怒られることはない。その遊び先さえ問題でなければ。

今日は何をしようか。清に会いにいくのかな、でもこのままひたすら何もしないで過ごすのもいい。

そんなことをぼんやり考えながら、重ねた両手の上に顎を乗せて目を瞑る。いつもならこのまま鳥の話し声をBGMに睡眠に突入するところだが、今日は違った。

目を閉じたたとんに、昨日のことがぶわっとコマ送りになって目蓋の裏に浮かんできた。

別のことを考えて振り払おうとしても、一度頭の隅から隅までを占拠したそれは簡単に消えるわけもなく、アズの顔やら声やら、――唇の感触やら痛みやらが、浮かんでは消えまた浮かびを繰り返す。

たまらず目を開けてもそれは同じだった。

「……もう、何なの」

体を捻り上半身を起こして二、三度頭を横に振る。

昨日の夜、寝ようとしたときからからずつとこうだ。寝ても覚めてもアズのことばかり思い出す。

これじゃあまるで、

「……ダメでしょそれは」

ないない。ないから。

そのありえない考えをかき消すようにもう一度首を横に振る。

だってあいつ全然色気ないし、あほだし、子供だし、俺の言うことに一々反応して笑ったり凹んだりするし、あほだし、いつも俺を見つけるとばって顔明るくなって近づいてくるし、えーとそれから、いや墓穴掘ってる気がするからここら辺で止めよう。

ああもう、誰かと喋って気分転換したい。そうだ誰か探しに行こう。

そう決めるとすぐに立ち上がって伸びをし、雲を蹴った。

…
…
…
…

小さな雲が飛び飛びに浮かんでいる。雲はひたすら真っ白なだけではなく、クリーム色だったり、薄桃色だったり、薄い薄い水色だったりとかく微妙に色が違う。時折緩やかな風が吹き、ゆっくりとその形を変えていく。

その上をふわふわと、俺はただ風に身を任せて飛んでいた。しかしこういうときに限って、知り合いどころか他の天使すら見当たらない。

眼前に広がるのは雲と、紅い点が一つ。……ちょっと待って、前にもあったよこういうの。

「ラースー！」

昨日から何度も何度も思い出していた声。雲の群れの向こうから、その持ち主が大きく手を振りながら近づいてきた。

だから、何でこういうときに限って……。

すっごい顔合わせづらいけど無視するわけにもいかず、俺は進むのを止めアズが近づいてくるのを待った。

しかしアズは一定の距離を保ち、俺のすぐ側までは近づいてこない。あれ、また？

するとアズは泣きべそかいたような顔になって、

「……どうして避けるんだよ」

「え？ 避けてないよ」

「避けてるよ」

避けてない、と言いつ返そうとしてふと気づいた。俺、さつきからアズが一步近づくと一步下がってる。ああ、これは……避けてるって言うのか。

「……ていうか平気なの？　ここ結構“白”寄りだけど」

「でも昨日の話途中だし」

やっぱりきたか。くるよな。

何が「でも」なのかよく分からないが、アズの顔色はいつもより白い。多分無理してるんだろう。本当にやばくなったら“黒”の方まで送り届けてやろう。

俺はため息混じりにふうと一息吐くと、アズの目の前まで近寄り髪をくしやりと撫でた。もちろん手袋越しに。もうすっかり右手の疵も癒えた、はずだったのだが、昨日無理したせいで傷口が開いてしまったので、聖布ぐるぐる巻きに逆戻り。今日も手袋は片手装備だ。

いきなり撫でられて驚いたらしいアズの双眸が俺を捉えたかと思うと、唇をきゅっと結んで、俺に抱きついてきた。

「うゝあゝッ!？」

当然その途端に派手な音がして、アズが触れた部分が灼けつくような熱を持つ。

耐え切れずに思わず声を上げると、アズは謝りながら即座に離れた。

「ぐめんッ……どどしよ……サファ……っ」

両腕を抱えて自分で自分を抱き締めるようにして、痛みが過ぎる

のを待つ。

視界の端に映ったアズは、一応は自らの天敵であるサファを捜しているようだった。

「いや、大、丈夫だから……」

痛みのピークは過ぎた。アズが一瞬で離れてくれたから、皮膚が溶けたってことはない。まだかなり痛いけど、もう少しすればまだ残っている痛みも消えるだろう。

「どこが大丈夫なんですか」

「っ」

突然出てきたサファに肩と腰を抱かれた。これはちょっと恥ずかしい。でもなんかすごい、一気に気が抜けて、俺は全体重をサファに預ける。なんでこう都合よく出てきてくれたのかは後で聞こう。

サファは俺の顔を一瞥してからアズを見て、

「貴方も 昨日の私のように なっても助けられませんか」

努めて冷静に言った。俺を抱く手に、少しだけ力が入る。

「そりゃ気持ち悪いけどそれよりリリースがっ」

アズは取り乱したままだ。

それをサファは一言落着きなさい、と制してから、

「すぐ離れたから大丈夫でしょう。もう平気ですね？」

そう言いながら俺の背中を優しく撫でた。俺はそれに答えるように頷く。

それを聞いたサファは軽く微笑んでから、俺とアズを交互に見た。

「さて。貴方達はそんなに叱られたいんですか？」

そんなことあるわけない。このままだとアズはともかく俺は反省文500枚と罰掃除確定だ。この前のがやっと終わったところなのに。どうやってサファこのピンチの腕の中から抜け出そうか考えを巡らせていると、アズがおずおずと、でもはつきりと言った。

「あの……なんでエルに触っても平気なの？」

それは俺もとても気になる。食い付いても聞き出したいところだ。俺が今後痛い思いをしないために、ひいてはサファやウイノにちくちく言われなかったためにも。

「それ俺も知りたい。なんで？」

「……………何の話です？」

そう言つてサファは眸を細めた。陽に透けた髪がきらめいてそれを際立たせる、とても美しい微笑み。常人ならこれでノックアウトされて「何でもあります……………」と眼球がハート型に固定されてしまうことだろう。

しかし俺もアズもそんなものでは誤魔化されない。まずサファに對してときめくこと自体があり得ない。マジない。どのくらいないかって言うと、冒険を始めたばかりのレベル1の勇者の前にいきなりラスボスがエンカウントしてくるくらいあり得ない。

と、またしてもどうでもいい方向に思考が脱線している俺の隣では、アズが孤軍奮闘していた。

「ギューとかチューとかしてたじゃん」

「悪魔なんかとしませんよそんなこと」

「濃いのでしたよ」

その語彙の幼さには少し疑問が残るが、レベル1もといアズの容赦ない追及が続く。

サファの顔に嫌悪の色が滲んでいくのが分かる。意外とサファは結構顔に出るタイプだ。

いつだったか、ルシーダがサファに頼み事をしたことがあった。サファはよっぽど気が進まなかったのか、口では「分かりました」と快く言っていたものの、眉間にはものすごく皺が寄っていた。それを目の当たりにしたルシーダは苦笑しつつ、そういう顔をするのは、できれば私が去った後にしてくれ、とか言ってたっけ。

またそうなっていることに気付いたのか、サファはその色を消すように額に手を当てると、少し間をおいてから、

「……アズ、でしたっけ。……あの悪魔はどうしてます？」

「悪魔？ エルのこと？」

「そう」

俺は思わずアズと顔を見合わせた。ついさっきまで気持ち悪がってた相手のことを尋ねるなんて、サファの考えてることがいまいち掴めない。まあそれはいつものことだと言えればいつものことだけど、でもそれを差し引いても毛嫌いしている“黒”のことを聞くなんては、偵察か。

アズも同じように思ったようで、

「何で？」

サファは答えない。

「心配してるの？」

やはり答えない。

しばらく無言の時が過ぎて、それまで難しい顔をして考え込んでいたアズが、あ・いいこと思いついた！ という感じで勢い勇んで口を開いた。

「俺だけ質問に答えるなんてズルイよ。交換条件！」

「交渉決裂ですね。帰りますよラース」

「ええ！？」

そしてぱつさり斬られた。

アズは大げさに項垂れてがっかりしてみせると、それからすぐにぱつと得意げになって言った。

「エルなら大丈夫だよ。誰にも負けないんだから！」

何が大丈夫なんだろう。何か勝負事でもしてたんだろうか。アズも実は知っていたりする？

サファは表情をほぼ変えずにただ一言、そうですかと返した。一応それ何の話？ と聞いてみたけれど、案の定スルー。

「貴方も早く戻りなさい。あの悪魔に叱られますよ」

「何だっけ、エルブ……」

そこまで言い掛けたところで、サファの手に口を軽く塞がれた。

「ラース、軽々しく真名など口にするものではありません。しかも悪魔の真名など……不吉を貰います」

真名。

書いて字の如く真の名前。

真名は自分だけが知っていて、他の者に知られないように普段は隠しておくものだ。だから「アズ」も「サファ」もそれはただの呼び名であって、本当の名前は別にある。もちろん俺も。

まあサファは俺が幼い頃から一緒だったからか真名を知ってるし、俺もサファの真名を知っている。

どうしてサファの保護者でもない俺が彼の真名を知ってるのかというと、

「えー、今さら何ゆってんの？ いつも真名で呼んでるくせに」

……そう。今アズが言ったように、サファとエルはお互いを真名で呼び合っているのだ。

真名は場合によっては命よりも大切にしなければならぬ（って習った）。真名を他人に知られることは弱点を握られることであり、下手したらそいつの操り人形になってしまいかねない。だから万が一真名を明かすとしても——そんなことは滅多にないことだが——普通なら本当に信頼している者くらいにしか明かさないし、しかも人前で堂々と呼んだりしないものなのだが。ましてや“白”と“黒”、対立し合う者同士なんて。

サファはこれ以上喋るのも煩わしい、といった感じの声で答えた。

「ただの嫌がらせですよ」

「嘘だあ」

「嘘なんてつきません」

この二人、実は仲良くなれるんじゃないだろうか。

「じゃあ何で真名で呼び合ってるの」

で、何で俺が喋ると黙るのさ。

しばらくサファは目を伏せて押し黙っていたが、軽くため息を吐くとアズを見た。

「……ほら、早く戻りなさい。ここは“白”が強すぎて貴方には毒です。倒れても知りませんよ」

「はぐらかした」

「ラースがそんなに掃除と反省文が好きだとは知りませんでした」

えー……。何そのいい笑顔。やめて。

サファはまたアズの方に視線を戻すと、ほんの少し顔を顰めた。それから帰れなくなりますよ、倒れないもん、ふらついてるじゃないですか、ふらついてないよと押し問答。

アズを見ると確かに顔色が悪いし、少しふらついているようだった。そろそろ本当に戻らないとやばそうだ。

「とりあえず近くまで送ってくるよ」

サファは“黒”には近付けない。俺は結構大丈夫。なら俺が行くのが適任だ。

アズの手を取り羽ばたく。
握った手が手袋越しでも少し冷たく感じられたのは、聖気にあてられたアズの体調が悪いせいだろうか。

「……私も行きます」

「え」

「早く行きますよ」

予想外にサファが俺たちのすぐ横についてきた。
大丈夫だもん……と呟くアズを無視して、三人で黒の方角へと進んでいった。

… … …

ある程度灰の領域を黒寄りに進んだところで一度歩み（飛びみ？）を止めた。

あんまり進むと今度はサファの体調が悪くなってくるからだ。これ以上はついて来ない方がいいだろう。

「サファはここから先は来ない方がいいよ」

「ですが……」

だからサファに倒れられる方がめんどくさいんだってば。どうしてついで来ようとするかな。
いやまあ俺を一人で黒の領域に近づけたくないからなんだろうけど。

渋るサファをどうしようか考えていると、アズが口を挟んできた。

「もう平気なのにー……」

「でもまだ顔悪いよ」

「うるさい」

お約束な言葉をかける。即座に言い返してきたところを見ると、それくらいには回復してきたようだ。

もっと濃い瘴気に浸ればすぐに全快するだろう。

もう一度サファに向き直って、目を見ながら言う。

「俺はサファみたいに軟弱じゃないし。それに向こうに近づけばアズのお守りも出てくるでしょ」

「……ならここで待ちます。近づき過ぎないように、すぐ戻って来なさい」

「ん」

ふう、やっと観念してくれた。本当は行かせたくないけど仕方ないから渋々、って感じがありありと伝わってくるけど。

じゃあ早速行こうかと言おうとしたら、またアズが口を開いた。

「エルは見てるよ」

「見てる？ 俺たちを？」

「うん……ずっと見てるよ」

「会話も聞いてんの？」

「聞こえてると思うけど……」

うーん、と首を傾げるアズ。

そういえば前にも何回かこんなことがあったような気がする。
エルには高精度のGPS探知機能が搭載されているんだった。

「……聞いているなら出てきたらどうです、あんたの大事なひよつこが大変なのに」

サファの低く苛ついた声が微かに空気を震わせた。反対向いてるからここからじゃ伺えないけど、きつと顔もその声に見合った表情になっているんだろう。

「ひよつこだって」

「ひよつこじゃないよっ」

アズはいつもの得意なぶくつとしたふくれっ面になって答えた。
頭を撫でるとふわりと嬉しそうな顔になる。百面相なのはいつものことだけど、ちょっと不意打ちでそれはやめてほしい。

……………ん？

今いる居場所が分かって、何してるのか分かって、何話している

のかも分かるのなら。

さつきサファがエルのことをアズに尋ねたこともエルにはお見通しなわけで。

それってつまり結構恥ずかしいんじゃないのかなあとか思いながらサファの方を見ると、やっぱりいつの間にか現れたエルと何か話をしていた。

すごい近距離で。

エルがサファの顎を指で持って、顔をクイと上に向かせる。サファはそれを拒むようにエルの胸を押す。

……いーな。俺らはまだ手袋越しにしか触れないのに。

この間もさつきも結局はぐらかされた。いつか絶対に聞き出してやる。

気付くとアズは俺の手を取って、指を絡ませていた。

それを見て一層その思いが強まる。

「ラース！ 帰りますよ」

エルの手から逃れたサファが叫ぶように言う。それを聞いたアズはえーと不満の声を漏らしたが、しょうがないというように手を離した。

「ラース……また明日も会える？」

「また明日、アズの仕事が終わったらいつもの場所で」

「うん！」

こっそりと、お互いにしか聞こえないぐらいの声で囁きあう。それから小さく笑い合って、俺はアズの頭を一撫でしてから、す

でに“白”へ向かって飛び始めているサファの後を追った。

結局ずっと頭を悩ませていた昨日の件についてはそんなに進展がなかった。

程よく緑に囲まれた学校。そこに通う男子生徒、瑞頼^{みずとみしん} 清は今日も平凡かつ穏やかな日常を過ごしていました。ある一点を除いては

ナレーションをつけるとしたらこんな感じになるだろう。

清は窓の外に俺の姿を捉えると、また厄介ごとが起きたとでも言うかのように額を抑えた。

期待に添って教室に入ってあげようかとも思ったが、それは止めてこの前と同じように「屋上へ」とサインを送った。

… … …

この屋上に来るのももう三度目か。抜けるような青空の下、見慣れたそこには所々小さな水溜まりができていた。どうやらさっきまで雨が降っていたらしいが、陽が出たおかげで濡れた床面はほとんど乾いてしまったらしい。

そうそう、どうでもいいことかもしれないけど、俺の名誉のために一応言っておく。今日ここに来たのは経過観察のためであって、別に遊びに来たわけじゃない。あくまで清に会うのはそのついでだ。…… 本当だつてば。

着ていたパーカーの袖を捲っていると、少し遅れて入り口の扉が

開き、清が入ってきた。

「よくここまで逃げずにやってきたな、褒めてやろう」

「また一人か。今日はどうしたんだ？」

「この間の報告と聞きたいことがあって」

渾身の魔王つぷりにひとかけらも触れられなかったので、俺も葬り去ることにした。

相変わらずツツコミの腕は磨いていないようだ。

「アズとは仲直りできたよ」

今日もこれから会う約束してるんだ、と付け足して、その節はお世話になりましたと頭を下げる。

「そっか、よかったな」

と、清は優しく微笑んでくれた。つられて俺も微笑を返す。

清と話していると何だか落ち着く。安心して何でも話してしまいたいになる。歳の割に老成しているんだろうか。これ言うときっと微妙な顔するだろっから黙っておこう。

そしてもう一つの用件を（むしろこれが今日のメインかもしれない）告げようとして、言葉に詰まった。

……ちよっと、いやかなり切り出しづらい。そう思っていたら、清のほうから切り出してくれた。

「それで聞きたいことって？」

「……友達にキスしたくなるのってどんなとき？」

「友達にはしないだろ普通」

間髪入れずに言葉が返ってくる。

「それはそうだけど」

「……したの？」

したの。

無言のままだったのを肯定と捉えてくれたのか、清の顔は呆気にとられていて、物も言えないといった感じになっている。

多分その相手が誰なのかも分かってるんだろうな。

……いたたまれない。

清が何て言えばいいのか、といった表情になっていたので、質問を変えることにした。

「……じゃあさ、友達に触りたくなったりする？」

「どういうこと？」

こう、と清の腕や肩に触れてみた。もちろん悪魔に触れたときのような痛みなんて感じない。

「それは分かるけどさ。つまりアズに触りたいってこと？」

「アズが俺に触りたいみたいで。でもアズに触ると怪我するし」

聖布に巻かれた右手を見る。昨日“白”に帰ったあと、聖堂の裏

庭にある聖なる泉にずーっと手を突っ込んでいたら少し良くなった。悪魔に触れた疵は治りが遅いらしいけど、いい加減治ってくれないと色々困る。

清は少し考えてから言った。

「触れない人なんていなかったからその気持ちは分からないけど…仲良くなりたいうってことだろ」

「仲はいいと思うんだけど」

「触れるのとないのじゃ結構違うよ？」

「どう違うの？」

「うーん……距離、かな？ 向かい合って話すのと手繋いで話すのって結構違うと思うけど」

清の手を握ってみる。ふと、手袋越しではあつたけど俺の手に触ってとても嬉しそうだったアズの顔が浮かんできた。確かに、感じる距離は違うのかもしれない。

ただ目を見て話すのと、手を握って目を見つめて話すのでは後者の方が気持ち伝わりやすいに決まってる。

「それで何でキスしちゃったんだ？」

「この前手袋はめて初めてまともに触ってみたんだ。それで顔とか触ってたらなんかキスした」

握っていた清の手を離して空を見上げた。ゆっくり目を閉じると浮かんでくるのはアズのアホ面。それと、サファとエルが濃い口付

けを交わしているところ。思わず目を開ける。

「ねえ、思い出したからついでに聞きたいんだけど、すっごい嫌いオーラ出してるけどキスは多分そんなに嫌がってないってどんな状況？」

「……え？ もう一回」

「普段はものすごい嫌いオーラ出してるんだけどキスするのはそこまで嫌がってないのってどんな状況だと思う？」

傍目から見たらサファはすごく嫌がっているように見えたけど、俺からしたらキスしてる最中は心の底からエルを嫌悪しているようには見えなかった。エルが去ったあとは指名手配犯みたいな形相になってたりするけど。

「えーと……それアズのことじゃないね？」

もちろん、と肯きを返す。

「アズの保護者と俺の……うーん……執事みたいな。サファが天使でエルが悪魔なんだけど、サファはエル……ていうか悪魔のこと毛嫌いしてて」

そういえば昨日はアズに対してそこまで敵意剥き出しでもなかったな。

まあ、アズの緩い空気に触れたら毒気が抜けるのも分かる気がする。

「好きだけと言えないとか？」

「そうなのかな」

もし万が一何かの間違いであの二人が好き合っているのだとしたら、俺は「好き」という感情に対して認識を改めないといけない。もつと甘さとか酸っぱさとかが入ってくるのかと思ってた。あれじゃあ激辛のスパイスしか入ってない。

「……ん？ そのエルとサファ？ は……触っても平気なのか？」

「うん。でも聞いても教えてくれないんだよ」

「全く触れないわけじゃないんだ」

清が不思議そうな顔を俺に向けた。

そう。何かしら悪魔に触れる方法はあるはずなんだ。サファとエルだけが特別なわけじゃないだろう。

あの二人も、過去にこうやって悩んだりしたのだろうか。

あの態度を思うとあんまり考えられないけれど。

「とりあえずそれは置いて……ラースはどうしたいの？」

真っ直ぐ俺の目を見ながら言う清。

どうしたい？

そっか。今までどうしようってことしか考えてなかったけど、俺はどうしたいんだろう。どうするのが正解なんだろうか。

「なかったことにはできないだろ」

それが無理なことくらい分かってる。

俺は。

アズとどうなりたい？

「……これからも、一緒にいられば、それで」

「そっか。でも友達はキスしないからね」

いいかな、と最後まで言う前に清が遮った。

分かっている。なあなあで済まそうとしていて、やっぱり甘い考えだ。でも一緒にいたい。アズは俺に触れたがってるけど、俺だってアズに直接触れてみたい。いつかアズが言ってくれたように、触れないと思ったら触りたくなる。触れないと言ったら俺はエルにだって触れないわけだけど、別にエルを触りたいとは思わない。そう思うのはアズに対してだけだ。

……何で？

そこまで考えて、

「少なくともラースは……何と言うか……アズのことを好きなんじゃないかな？」

頭の中が一瞬真っ白になって、その二文字が頭の中を占拠して、思考が停止した。

段々と耳に音が戻ってくる。

それと同時に、じわ、と耳まで熱くなっていくのが分かった。

思わず片手で口を押さえる。

なんか、視界がぐるぐるしてるような気持ちになって、考えがまとまらない。

好き？ 俺が、アズを。

―― あえて考えないようにしてきたのに。

「無い。無い無い無い無い。何かの間違い」

「あるだろ。その顔」

どんな顔になってるんだ。

一度深呼吸して、乱れた呼吸やら鼓動やらを整える。

「……そもそも好きって具体的にどういう感じなの」

「ラースが感じてる通りだよ」

俺が感じてる通り？ 甘くて酸っぱくて？

俺が感じてるアズは、……なんかいつも小型犬がキャンキャン吠えてるようなイメージ。それから悪魔のくせに天使の心配するような変なやつ。あとは仕事に対する姿勢が真面目。性格は単純で俺の言葉に一喜一憂して、あとは結構よく泣く。ころころ表情が変わる。

基本いつもバカなんだけど一緒にいて楽しくて、会えなかったりする
とつまんなくて、うん、つまり、

「キャンキャンしてたり変なやつだなんて思う」

「変な……」

「悪魔なのに俺のこと心配したりするし」

「まあ……いい子だね」

「うん」

ずっと一緒にいてほしい。隣にいてほしいと思う。サファや他の
人たちよりも。

触りたいのもキスしたいと思うのも。他の人にべたつくついで
ててイラつくのも。

泣かせたくなくて笑ってほしいと思うのも、怪我をしてまで触
れたいと思うのも。

全部アズだけだ。これがつまり、好きってことなのかな。

あえて考えないようにしてきたのは、相手が悪魔だったからなん
だろうか。

でも、この気持ちがもし「好き」って感情なのだとしたら、もう
悪魔だの天使だのそういうことはどうでもいいと思えるくらいに。

——そうか。俺、アズが好きだったんだ。

俺を見つめたままの清の手を取る。

「……うん。なんか分かった」

返事の代わりに清は微笑んだ。初夏の空気を纏ったそよ風がふわりと髪を撫でた。

俺も何か返事をしようとしたけど、自分のこととなると何だか照れくさくて。

どうしようか迷っていたら、

「あっラース！」

ふよふよと渦中の悪魔が現れ、いつもと何も変わらない声を発しながら俺たちの横に降り立った。

「ずるいよっ 一人で清に会いに行くなんて」

「ね？ キャンキャンしてるでしょ」

アズの顔を見たらすっかり気が抜けてしまった。フ、と口端から笑いが漏れていつもの調子を取り戻す。

清があはは、と声を上げて笑うと、事情が飲み込めずに慌てた様子でアズが、

「何で仲良くなってるの！ 清俺もっ」

と、清の腕を掴んだ。というか絡みついた。

「残念でした、清は俺の管轄」

ずるいよと慌てるアズを横目、両手に手袋を装着する。何気に初両手装備だ。

「ラースばっか清と遊んでずるいつ」

「アズには俺がいればいいでしょ」

くしゃり、とアズの頭を撫でる。アズの髪質は多分、柔らかい。二つの朱色の瞳を大きくして、口をぽかんと開けたまま俺を見上げてきた。

「何」

「えっ……あ……ううんっ」

えへへ、と笑みを零しながらというよりはただ漏らしながら、アズは清の腕をぎゅっと抱えた。清は急に肩ごと抱え込まれて痛がっている。

その光景にすこしムツとしてしまう。

好きな相手が（自覚したばっかだけど）自分以外の人といちゃついていることに対するアズへの嫉妬と、何のリスクを負うことなく悪魔に触れる人間^清への嫉妬が、胸をちくりと刺した。

なんだこれ。おもしろくない。

芽生え始めてしまった本来天使が抱くべきではない醜い感情を、無理やりかなぐり捨てて話題を変える。

「今だってエルに見られてるんでしょ、清と会ってていいの？」

「だ……だめだけどお……」

「怒られても知らないよ」

ターゲット以外の人間と喋っていることを咎められて、しゅんと落ち込んでいたのはついこの間のことだ。

本当に学習能力が無いな、と思うのはこれでもう何度目だったか。しかし次の瞬間、全く予想もしなかった言葉が返ってきた。

「ラースがいるからじゃん……」

「え？」

「俺ラースを追ってきたんだもん」

俺を。仕事終わりに会う約束だつてしてたのに何でまた。

二の句が継がないでいると、またアズが、

「いけない？」

と、じつと見つめてきた。別にいけないはないけど、と首を横に振る。

アズの言葉の意味も、隠されているかもしれない真意も、さっぱり分からない。特に深い意味などなく天然で言っているのだろうか。それとも小悪魔とかいうやつなんだろうか。まあ目の前にいるのは小悪魔どころか普通に悪魔なのだが。

「じゃあいいじゃん。帰ろ」

すっかり口を挟めないでいる清の腕を放し、俺の手を取った。

「じゃまたね清！」

振り返ったアズが元気いっぱいと言った後の、清の「来ても声掛

けないように……」という微かな呟きは聞かなかったことにしよう。
俺も清に向き直り、自分の宙ぶらりんだった状態に答えを出して
くれたお礼を告げる。

「ありがとう」

「しっかりやれよ」

「うん」

何を？　だなんて野暮なことは聞かない。こつこつと答えが出た以
上、これからやることは決まっている。

そして二人同時にコンクリートを蹴った。

…
…
…
…

ぴったり横を飛ぶアズに目をやる。心なしか嬉しそうに見えるのは、俺の欲目も入っているからだろうか。一度止まり、声をかけて

「なに？」

とじつと見つめてくるアズの額に、唇でそつと触れた。

触れるか触れないかというくらい微かなもの。ぱり、と微弱な痺れが唇に走った。俺は唇を軽く抑えて、状況を飲み込めずに茫然としているアズから離れた。

「えっ……え？ ラース……何今……っ」

額を押さえてあたふたと慌てるアズが可愛く見える。こんな可愛かったっけ？ 今までにも何度かそう思うことはあったけど、そのとき感じていたのはペット的な可愛さだった気がするのに。

「何なに……っ」

「好きだよ」

え、と小さく息を呑む音が聞こえた。アズはそのまま止まってしまつて動かない。

その視線は俺を捉えたままで。

気持ちを自覚したばかりなのにもうそれを伝えるのは、早急なことに思われるかもしれない。けれど、この気持ちを後生大事に胸の中にしまつておいたつて何の意味もない。知つておいてほしくて、言いたかつたから言つた。ただそれだけだ。

「え……あの、えっ？」

「……じゃあね」

気持ちを伝えることに照れや緊張は特になかつたけど、こういう俺が注視されている状況が続くといたたまれなくなってくる。言つた直後はやりきつた感とか充実感があつたけれど、今は変な汗も出てきたので、言い逃げを決めた。

「待つて待つてっ」

「待たない」

「ラースっ」

しかし先回りされて行く手を阻まれた。

しばらくお互い無言の時間が流れる。たまに風が吹いて雲が流れるか、髪や服を揺らすぐらいで他に動くものはない。

居心地が悪くて、アズから目を逸らして頭を掻く。さつきからざくざく突き刺さるアズの視線が痛い。耐え切れなくなつて沈黙を破つたのは俺だつた。

「……何」

「うっんっ」

それきり何かを考え込むようにして黙りこくり、また沈黙。どうすればいいのか迷っていると、アズが呟いた。

「ラースと契約したらどうなるのかな」

「え？」

「……墮天しちゃうか」

何を言い出すのかと思ったら、ある意味斬新な発想だった。悪魔と契約を交わす天使だなんて聞いたことがない。もちろんどうなるかも分からないが、まあ墮天するのが妥当なところで、決して愉快な事態にはならないだろう。

「アズが天使になればいいじゃん」

「えっ……そんな簡単に言わないでよ……」

目を伏せて口を尖らせる。髪を指でくるくると弄る様はすねた子供みたいで、到底悪魔には見えない。

「うん、アズの悪魔っぽくないとこ好きだよ」

「えっえっ？ それって褒めてはないよね……むしろけなして……？」

「褒めてる」

アズの頬に触る。直に触ったらもつとぶにぶにしていそうだ。

「でも俺悪魔だよ、分かってる？」

「うん」

そのまま手を背にすべらせて羽を撫でる。一瞬びくつと身体が震えたが、構わず撫で続ける。

「や……っ」

アズは小刻みに身体を震わせている。

何だか虐めてるような変な気分になってきそうだったので羽から手を離し、頬を撫でる。アズはほっとした様子で俺の手に頬をすり寄せた。

「ラースばかりずるい……俺も手袋買お」

非売品のうえに特注中の特注品だけどこれ。

そういえば普通の手袋で触れたらどうなるんだろう。普通に焦げそうだ。

「じゃあこれ、片方」

非売品を探し回るところを想像すると可哀想になったので、片方の手袋を外して手渡した。ぱあっと瞳を輝かせたアズは嬉しそうにいそいそと手袋をはめると、そつと俺の頬に触れてきた。そして容赦なくペタペタと触りまくってきた。

「……触れるっていいね」

「うん」

一度手を掴んで外し、代わりにもう一度俺がアズの片頬を包む。その感触を確かめるように、アズはゆっくり目を閉じた。

「ぎゅーってしたいな」

「……俺も」

「でも灼けちゃうからだめだね……」

できることなら今すぐにでも抱き締めたい。

こんなに近くにいて、手だけなら触れているのに。

俺はまあ、痛いのは嫌だけど死なない程度だったら焼けようと焦げようとどうでもいい。でもそんな勝手で抱き締めて怪我をしたら、悲しむのはアズだ。ただの俺のわがままでアズを泣かせたくない。

『近いのに遠い』っていうのは、こういうときに使う言葉なんだろうな、とふと思った。

「……でも全く触る方法が無いわけじゃなさそうだし」

「……うん、探そう」

頬に触れたままの俺の手に、アズはそつと手を添えて目を開いた。瞳には決意の色が宿っている。

でもその前に確かめておかなければいけないことがある。

「まだアズの気持ち聞いてないんだけど」

アズはまた俺を見たまま動きが止まった。
きょとんという言葉が似合いすぎるような顔だな。

「え……あれ……」

「あれ？」

「言っていないっけ？」

「言われてない」

これまでの反応を見ていると限りなくそうなんだろうとは思うが、念のため確認しておくべきだ。これで俺の一人相撲だったりした日には、当分立ち直れそうにない。

アズはおかしいなあ、とかえへへ、とか独りごちながら照れ笑う。そして一度大きく深呼吸をしてから、真っ直ぐに俺を見つめてきた。

「大好きだよ」

その言葉を聞いた瞬間、全身から力が抜けた。そのまま蹲りそうになったが踏張って体勢を整える。

よかった……、嬉しい。

普段、冷めてるだの何だのよく言われるけど、これには俺だってさすがに口元が緩む。

そしてそれを隠す必要はない。

本当はこのままキスでもしたいところだけど、それは堪えて親指

でアズの唇を拭った。

アズは俺の指の動きを目で追ったあと、

「エルに聞いてみようかな。天使に触る方法」

「教えてくれるかな」

「……分かんないけど」

「サファは教えてくれないからなー……」

「ケチ」

「ね」

そう言い合ってお互いに少し笑った。

俺も帰ったらサファにもう一度聞いてみよう。それで教えてくれないかったら教えてくれるまで食い下がってみよう。

「とりあえず今日は帰ろうか」

アズから手を離し、その胸元で握られたままの手袋に目をやる。

「……それ片方貸しておくから、方法見つかったら返して」

「うんっ」

じゃあね、とまた頬を撫でる。そして飛ばうとし

「大好きだよラース」

て、え、

「大好き」

「え……、う、うん」

堪らず目を逸らす。アズは俺の手を取って、手袋越しに手の甲にキスを落とした。

それからすぐに離れて、

「じゃまたね」

と言いながら笑って（たと思う、あんまりよく顔見らんなかった）羽ばたいた。一度振り向いてぶんぶん手を振ってきたので口元を押さえたまま俺も振り返すと、満足気に黒の方へと飛び去っていった。

え、俺？　俺はしばらくその場から動けなかった。

首の後ろがすごく熱くて、自然と唇が緩みそうになるのを抑えるのに必死だった。

あーもう、……俺だって大好きだよ。

「うえ、紫……」

“ 白の聖堂 ” の裏庭には聖なる泉がある。聖なる泉はもうそのまま聖水から成っている泉だ。浴びれば些細な呪いや傷なんかは簡単に治せる。飲んだりして直接体内に取り込めば、身体の深部まで清めることもできる。

というわけで俺もその恩恵にあずかろうとここ二、三日は泉に通ってるわけだけど、右手の疵は閉じたり開いたりしたせいかどす黒い紫色に変色していた。見た目が派手なだけで、実は押しても痛みはそこまで酷くない。今聖布を巻いたり泉に来たりしているのは、手の見た目を少しでも早く良くするためだ。これじゃあ会う人会う人片っ端から事情を聞かれてウザいだろうから。

「あーあ」

雲の上にも草や花や土はある。この泉の周りに生えている草は柔らかくて、寝ていても痛くならない。だから俺はその上に仰向けに寝転がって、空を見上げた。ほとんど気休めにしかないけど、右手は泉に、外した聖布はパーカーのポケットに突っ込んでおいた。

色鮮やかな蝶が二匹、楽しそうに舞いながら花にとまった。薄い水色をした小さな鳥は気持ち良さそうに歌を歌っている。今日も退屈なくらい平和だ。

木陰を作り出す木々を眺めて、ぼんやりと昨日のことを考える。それにしても昨日は色々濃い一日だった。

結局あのは顔が熱いわ緩むわで、まともに動けるまで一時間くらいかった。日が落ちて暗くなる前に帰ろうと思って立ち上がったのは、アズが去ってずいぶん経ってからのことだった。

帰ってすぐにサファの元へ向かったが、外出中で会えなかった。まったく肝心なときにいないんだから。

今日はもう戻っているだろう。もうしばらくしたらまたサファを探しに行こう。

と思っていたら、

「こんなところで何をしているんです」

サクサクと草を踏む音がして、サファが顔を覗き込んできた。ちようどよく現われてくれた。泉に手を差し入れたまま上半身を起こすと、サファが隣に座った。

「とりあえず仕事行く前に治癒しとこうと思って」

「まだ痛みますか？」

「まあ少し？」

「そうですね……」

サファはこの疵を見たらきつと、今よりももっと悪魔を嫌うだろう。特にアズを。

聖布で巻いて隠しちゃうのが一番いいんだけど、タイミングがなしな。どうしょ。

「……すみませんでした」

「え？」

「私のせいで傷が開いたでしょう」

言いながらサファは一度泉に目をやった。視線を俺の顔に戻して、そして静かに言葉を続ける。

「天使が悪魔に触れるとどうなるのか、何故悪魔に近付くなど言い聞かせてきたのか、貴方を悪魔から遠ざけるだけではなく、私が貴方にきちんと説明するべきでした。全て私のせいです。申し訳ありません」

そう言っ て目を伏せて頭を下げる。

「え、ちよつとそういうのどうすればいいか分からないからやめてよ。顔上げてよ」

サファは何も言わない。

「サ……わっ」

急に抱き寄せられた。弾みで右手を泉から抜いてしまい、慌てて隠す。……見られてないよね？

「貴方にまで何かあったら……っ」

絞りだすような声で呟いたかと思うと、俺を抱き締める腕の力が更に強まった。

サラサラの髪が鼻先に当たって少しくすぐったい。

「痛いってば。ねえってば、……サファ？」

今何がどうなってる、サファが言っていることも何で俺が抱き締められてるのかもよく分からない。ただ、俺をいつも護ってくれているサファが、なんだかひどく頼りなげというか儚げに見えた。

「……大丈夫だって。俺は死んでないしここにいるよ」

サファを抱き締め返して、背中をあやすようにポンポンと軽く叩く。そうして自然と口について出たのが今のセリフ。ぶっちゃけ自分でもよく分からないこと言ってると思うけど、とにかくサファを落ち着かせなきゃと思って浮かんだ言葉がこれだった。

とりあえず、サファの肩の微かな震えが治まるまではこのままでもいいよ。

そつだ、ついでに今のうちに聖布を巻いておこう。手先の器用さには自信がある。

「落ち着いた？」

しばらく経って、俺は抱きついたままのサファに話し掛けた。

「ええ、取り乱してしまいましたね。失礼しました」

すました顔をして離れていき、俺はやつと両腕から解放される。サファは何事も無かったかのように六枚の羽を出すと、

「今日は仕事はいいです。もう少し休みなさい。ただし“白”から

出てはいけませんよ」

「サファはどこ行くの」

「私にはやらなければならないことがありますので」

そう言って飛び立っていった。

サファの仕事は基本的に内勤だから、今出かけていったのは恐らく私用のためだ。ていうかサファっていつも何してるんだろ。気になるし、しかも悪魔に触る方法聞き忘れちゃったし暇だしついてってみよつと。

静かに羽を伸ばして、気付かれないようにサファの後を追った。

…
…
…
…

おかしいな。脚には自信あるのにサファを見失った。

しかも気づけばここはとくに灰の領域だ。

白の領域から出るなって言われたけど出ちゃったものは仕方ない。出ちゃったついでにとりあえずいつもの木まで行ってみよう。

太めの枝に腰を降ろそうとしたとき、遠くからすごい勢いでアズが飛んでくるのが見えた。

顔が空気抵抗で取れちゃうんじゃないかってスピードに呆氣に取られて、速いなとか思いつつ目で追っていたが、我に返るとまた昨日を思い出して心臓が跳ねた。

そんなに俺に早く会いたかったのか。

とか甘い考えも浮かんだけれど、近付いてくるアズの顔が蒼白になっていくからどうやら違うようだ。

何か事件でも起こったのか？ サファが悪魔に食われたとか。そんな奇特な悪魔がいたら、サファなんか食ったらお腹壊すからやめたほうがいいよって忠告してやりたい。

「ラース！」

「どうしたの」

「見せてっ」

俺の質問を無視して、アズは昨日貸した手袋をはめた手で俺の右手の聖布を強引に剥ぎ取った。

その下に隠されていた毒々しい色合いの傷痕が露出する。まずい。とつさに左手で隠したが遅かった。アズの顔は更に蒼白くなっていく。

「そんな……」

「いや、これ見た目が派手なだけで別に痛くないよ」

言っではみたもののあまり意味のないフォローだと思う。無論アズだって聞いちゃいない。そうすることが当たり前のように黙ったまま俯いている。

俺もなんて言えばいいのかわからなくて、結局黙ったままアズを見る。

「ラースとは……触る方法見つけるまで会えない」

絞りだすような涙声が耳に響く。

アズはくるりと背を向けると、そのまま立ち去ろうとしているのか黒い羽を広げた。

「アズ待つて」

「ついてこないで……っ」

「アズ」

見ればその小さな肩は小刻みに震えていた。

行かせないように腕を掴むことだっでできない。ていうか手袋どこやったっけ？　ぱたぱた体を叩きながら探しても見つからない。

ていうかまた泣かせた。これで何回目だよ、ああもう、本当に最悪だ俺。

「……ごめん」

「え……？　何でラースが謝るの？」

不思議そうにアズが振り向く。

「何でって」

「悪いのは俺の体だよ」

それこそ何でだ。

「アズは悪くないよ」

「でも」

「悪くない」

畳み掛けるように言葉を重ねて、アズの反論を否定する。

アズはモゴモゴと口を動かしていたが、それからそっぽを向いて軽く鼻をすすった。

俺はその時になってやっとデニムのポケットに突っ込みっぱなしだった手袋を発見した。それをしっかり左手にはめてアズの前に立つ。

「アズ」

反応なし。

「アズってば」

そつと頬に触れると、これにはさすがに身じろいで、やっと目を合わせてくれた。それから俺の手に手を添えると、ゆっくり目を閉じて頬をすりよせてきた。

……何この可愛い生き物。

そのままアズは手の感触を確かめるように、味わうように、目を閉じたまま動かなかった。

しばらくして目を開けると、

「そついえば……ラース触らなくて平気って言ってたよね？ よか

った」

え？ そんなこと言っただけ？

「あれ？ 言っていないっけ？」

「覚えてないけど……もし言っただとしても、それは今まで他の誰かを触りたくなかったことがなかったからだと思う」

「そういうの……俺が初めてなんだ？」

頷きを返す。

誰かに触れなくて困ったことなんてこれまでに一度もなかった。

「俺だけかあ……嬉しい」

頬がほんのり赤くなって、顔はいつも以上に弛んでいて。

「俺が初めての人」

その上さらに心底嬉しそうに歯の浮くような台詞を言われたら、こっちだってつられて赤くなってしまいそうだ。まあもうなっただけ。

「何で黙ってるの？」

だから、何でと言われなくても。

「……何喋ればいいのか分かんないから」

気の利いた台詞なんて出てこないし、いくらなんでもこういうときに茶化するような真似もできない。そしたら必然的に黙って見てるくらいしかできなくなってしまった。

「何でもいいんだよ」

俺の手を両手でぎゅっと握り、照れながら微笑んでくる。それなら、と少しだけ逡巡してから、

「早く直接触りたいね」

とだけ呟くように言った。

アズはまた無言になり、手を離して考え込んでしまった。しまった、やっちゃったかと思いどうしようか迷っていると。

「……問い詰める。今すぐ行こ！ エルたちのところ！」

そう言ってズイツと手を差し伸べてきた。

また傷つけてしまったのかと焦っていたので予想外の言葉に少し呆気を取られたけど、すぐにその手を取った。……アズがちょっと、本当にちよつとだけど格好良く見えたことは内緒だ。

アズの『エルはこっちだよレーダー（ただの勘）』の赴くままに連れられて来ると、この前見つけた廃神殿に着いた。アズには悪いけど十中八九いないだろうと高を括っていると、なんとエルとおまけにサファまで見つけた。

倒れた柱の陰に隠れて二人に話し掛けるチャンスを探う。声はよく聞き取れないが二人とも難しそうな顔をしていて、言い争っているようにも見えた。

俺達がいらないのに二人だけで会っていたんだろうか。まあこうやってそこにいるんだからそうなんだろうけど、だとしたらどういう目的で？ さっぱり分からない。そうだ、分からないことといえばもう一つ。

「アズさ、どうして俺の手がこうなってること知ってたの」

「ああ……サファが教えてくれたんだ」

まったく余計なことをしてくれる。そもそもこんな酷い見た目になったのは、もはやアズ触ったからってだけじゃないと思うんだけど。とにかく、これからサファとアズを二人だけで接触させないように気をつけよう。色々危険すぎる。

人知れずささやかな決意をして、サファ達に視線を戻す。エルがサファの顎を掴み、突き放し、サファはエルの頬を撫でて、背を向けるエルの肩を掴んでいた。俺達の気も知らないでというか知る由もないので触りまくっている。

「あ、エル帰っちゃう」

アズはそんな二人の間にひよこつと割って入っていった。

「ねー何で触れるの？」

「……アズ」

「何で？」

「ラ……ラース……」

エルはアズを見ても眉一つ動かさなかったが、サファは俺を見てあからさまに嫌な顔をした。余程この密会を見られなくなかったんだろう。

「俺だってラースに触りたいっ」

「……サファエルに聞け」

「サファっ」

「……エルブランカに聞いて下さい。私は知りません」

「エル！」

焦れたアズが急かすと、エルは観念したのかため息を吐いた。

「要は——」

べしつと鈍い音がして、エルの口が塞がれた。サファは鋭く睨んでいるがエルはそれを気にすることなく手を外して握り、サファの腰を強く抱いた。離せともがいているけど、サファを抱き締める腕はびくともしない。

俺とアズはエルの言葉を今か今かと待った。

「……痛いのが我慢して一度セックスすればいい」

エル以外の三人の時間が止まった。

「バ……ッ馬鹿なことを言うな！ そんなわけないだろう！！」

沈黙をぶち破ったのはサファだった。顔を真っ赤にしてエルの発言を掻き消すように叫んだ。あんな近距離で大声を出されてエルの耳は大丈夫なんだろうか。

セ……交われば触れるようになるというのは多分ていうか絶対嘘だ。なんて分かりにくい冗談なんだろう。でもこの単純お馬鹿な悪魔はそれを信じたようで、

「い……痛くなかった……？」

と、サファの腰あたりをまじまじと見つめた。

「そんなみ……淫らな事」

「したの？」

「誰がしますか！」

「淫らだったの？」

「違……エルブランカッ」

真っ赤になって反応するサファが珍しくて面白くて、アズと俺とで交互に質問攻めにすると、堪えきれなくなったのかサファは忌々しげにエルを見た。

その反応に満足したのかエルはフツと笑みを浮かべた。

「やめとけよ、焦げて終わりだからな」

「冗談かあ。なんだ」

やっぱり本気にしていたらしい。

「じゃどーするの？」

「真名を交わせばいい」

「真名……」

真名を。誰にも知られちゃいけない名前を。そっか、確かに触りたくなるくらい好きな相手となら明かし合っても大丈夫かもしれない。

で、どうやって交わせばいいの。

「悪魔の契約と同じ要領だ、アズ？」

「えっ、と……自分の真名と相手の真名を言って契約の意志を明確に示す？」

「そうだ、ただこれは契約ではないから束縛や拘束、支配といった形になる。わかるな？」

「はい！」

魔力を持たない人間相手になら真名を知られても特に問題はないだろう。ていうか悪魔の契約ってそんなことしてたのか。全然知らなかった。

……。

「束縛や拘束だって」

エルに抱かれたままのサファに小言で囁く。サファは耳を塞いでそっぽを向いた。

「支配だって」

「何も聞こえませんが？」

文末に「サファもそうなんだーへえーふーん」というカッコ書きがあるのを悟ったのか素っ気なくされてしまった。

悪魔二人は話を続ける。

「真名を相手に与えるということは自分の弱点を渡すのと同じだ。中にはよほど強いやつが真名を隠しもしないことがあるが……例え真名を交わしても他人のいるとこで呼ぶとまずい。分かるな？」

「悪用されるから？」

「そうだ、つまり常にリスクを伴う。覚悟はあるのか」

エルがそこまで言ったところでアズが俺を見た。

そんなリスクなんて、例えその十倍くらいでつかいリスクだったとしても背負い込んでやる。ここまで来て怖気づくような温い気持ちじゃないんだ。

もちろんある、と言おうと口を開いたとき。

「ラース」

耳から手を外して真剣な面持ちになったサファと目が合う。

「……そもそもこんなことをすること自体許されませんが……、いくら親しいと言えど相手は悪魔です。アズは別としても彼の周りにいる者は彼とは違うということを忘れないように」

アズやエルみたいな悪魔は珍しい。悪魔の多くは天使を見ると、殺したり喰おうとしたりと条件反射的に襲ってくる。もちろんそんなことないのもいるけど、やはり少ない。

アズを見るとにこつと笑った。

「ラースは俺が守るよ。エルがサファ守ってるみたい」

守られてません、と喉の奥で呟くような声が聞こえた。腰をしっかり抱かれたままで何言ってるんだか。体勢だけ見れば今も十分守られているのに。

「よろしく」

「……貴方も『俺が守る』くらい言ったらどうです？」

「それは分かりきったことじゃん」

返答はなく、その代わりに遠慮の欠けらもないため息が返ってくる。アズとエルはとくに悪魔契約講義を終えていて、黙って俺達を見ていた。

三人分の視線に痒さを覚える。中でもアズは、俺からその言葉を聞きたいなと目を輝かせていた。……そんな風にされたらしないわけにはいかなくなるじゃないか。

アズの頬に手を伸ばす。外側の革のごわついた感触と、内側の柔らかい毛皮が外界との接触を拒む。

「アズは俺が守るよ」

目を逸らさずにそう言う目と目の前の顔はほんのり紅くなり、俺もつられて少しだけ照れた。すぐに二人きりじゃないことを思い出して手を離してエルを見る。

「儀式ではないから言葉は何だっていい。相手の真名を呼んで縛ればいいだけだ。ただし強すぎる言霊は相手の方が魔力が高かった時に跳ね返ってくるから、言葉と相手は選べ」

アズはエルの言葉にうんうんと頷いているが俺にはなんかよく分からない。

「ラーズは勉強不足過ぎです」

「……学校の勉強なんて将来何の役にも立たないよ」

「うん」

まったくもう、と呆れた表情を浮かべられる。
アズは俺とサファの掛け合いを待ってから、もういい？ と少し
窺うようにして、

「ラース、行こっ」

手をぎゅっと握ってきた。

早くそれを実行したくてたまらないといった感じで。

「うん」

負けじと握り返す。もちろん俺だって同じ気持ちだ。早く。早く
直接触りたくてたまらない。ここでぐだついている時間ももつた
ない。

どこか二人きりになれる静かな場所へ、後ろも振り返らずに飛び
出した。

月と星の灯りが暗闇を淡く薄めていた。目を下に向けると下界はもう夜のようで、遙か遠くにあるはずの人工的な光がそれをすつかり打ち消しているのがよく見えた。それはただ視覚情報として入ってきてはすぐに流れ消える。今の俺にそんなものにかまけている余裕はなかった。

「どこまで行く？」

廃神殿から大分距離が取れたところでアズに声をかけた。前へ前へと急いでいたが、辺りに人影もないしもうそろそろいいだろう。

「そうだね……、あの雲にしょ」

濃紺の空に浮かぶ厚みのある雲へと降りる。足をつけるとその部分はゆっくり沈んで俺達を包み込んだ。二人だけの空間ができて、これでそう簡単に誰かに見られることはない。内側の白色はぼんやりと薄明るく、お互いの姿を見失うことはなかった。

「じゃあ、まず俺からやるね。……真名、教えて？」

向かい合ってアズが言う。

ふと、自分の手がしつとりと汗をかいているのに気づいた。心なしか心臓が波打つ音も聞こえる、気がする。ガラにもなく緊張しているんだろうか。真名を他人に明かすなんて生まれて初めてだし、この先もないだろうから。

「……大丈夫？ 俺まだ我慢できるよ、今度にする？」

そんな機微を敏感に感じ取ったのか、アズが心配そうに覗き込んできた。

そんなことないだろうに。なんかこの言い方だともものすごく自惚れてるようだけど、アズがどれだけ俺に触りたいか分かってるから、本当に悪魔らしくない。

「大丈夫。俺も早く、触りたいから」

強がりじゃないということを示したくて真っ直ぐ目を見て言つと、気遣わしげな表情が少し弛んだ。

「……俺の真名は、」

一段と鼓動が早くなるのが分かった。それを落ち着けるために一度目を閉じて、大きく息を吸い込み追い払うように吐き出す。

「——ラシエルド」

「ラシエルド？」

かく、とただ首を動かして首肯する。

多分生まれて初めて口にしたその名前は、音となって雲の壁に吸い込まれていった。

自分の心臓の音以外に聞こえるのはお互いの息遣いだけ。その中で目と目が合う。

「『ラシエルド』……俺を拒まないで」

初めて呼ばれた真名は、優しく俺を“縛”った。

見た目は何も変わってないけれど、何か不思議な膜が俺を包んだように思えた。

一息吐いたアズは手袋を外して手を伸ばしてくる。期待と不安と緊張とをない交ぜにした様子で。微かに震えるそれが俺の頬に触れるまでの時間が、ひどく長いものを感じられた。

——ぺた。

少し高めの体温。肌と肌が触れる感覚。痛く、ない。

驚きとか喜びとか、それ以上に顔を綻ばせるアズが愛おしくてその手に手を添えようとすると、

「わっ」

慌てた様子で離れられた。

拒まれるという思わぬ反応に、傷つくより前に驚く。

「リースもやらないとだめだよ。今は俺からは触れるけどリースからはまだ触れないままだから」

なるほど、俺もアズを“縛”らないとダメなのか。

「どうすればいいの」

「契約のときは命令するんだけど、さっきのはお願いしたの。命令じゃ強すぎるから」

「何て言えばいい？」

「何でもいいよ。触れるようになれば……」

「分かった」

じゃあ、とアズに向き直る。

まず真名を言って次に“お願い”すればいいんだな。軽く息を吸ったところで大変なことに気がついた。

「……大変。アズの真名が分からない」

「あつ、アズユラルトだよ」

「アズユラルト」

「うん、そう」

初めて聞く好きな相手の真名。あつさり教えてくれたということは、俺のことを心から信じてくれているということ。それだけでも嬉しくなる。

気を取り直す。心配そうに見つめるアズへ、心に浮かんだ言葉を声にする。丁寧に、一字一字。

「……『アズユラルト』、俺を受け入れて」

乾いた口から出た声も、音となって雲の壁に吸い込まれていく。言ったあと、気が抜けたのか少し力が抜けた。ふらつく足をなんとか踏張らせて姿勢を保つ。

とにかく、これでもう触れるようになったはずだ。手袋を外してアズの頬に手を伸ばす。きっと俺も今、期待とか不安とかでこっち

やになった顔をしているんだろう。

負けず劣らず震える指先でまず軽く触れて、痛みがないことを確認する。それから今度はしっかりと、両手で頬を包み込んだ。

やっと……、直接触れた。ずっと触れたかったもの。布一枚の距離が近くて遠くてもどかしかった。それに今、やっと触れている。

「ラースの手、冷たい」

「優しい心の持ち主は手が冷たいんだよ」

「あはは、じゃあ冷たくない俺は心が冷たいってこと？」

「子供って体温高いらしいよ」

「それどーゆー意味？」

そんな他愛もない会話をして。

ぎゅっと、きつくきつく抱き合った。もう離さないとでもいうように。

「ずっとこうしたかった……」

「俺も」

遠回りして疵ついて傷つけて、やっとここまで。

指に絡まないさらさらの髪。想像していたよりもぷにぷにした頬。そつと唇を重ねると、この前とは違い痛みがないせい、かわらかさがダイレクトに伝わってきた。

「ラース」

アズが俺の頬を撫でて口づけてくる。口づける度にお互いを抱き締める力は強くなっている。もう痛いくらいだった。でもそんなことは気にならないほど、ただ嬉しさとか喜びとかそっくりなものが身体中を占めていた。

まだしばらくはこのまま浸っていよう。多分それは、アズも同じ気持ちだろうから。

どれくらい経っただろう。

ずいぶん長い時間言葉もなく抱き合っただけだ。変わったことといえど、体勢くらい。真名を交わしたときは立っていたが、今は俺の脚の間にアズがいて、向かい合って座っている。お互いを離すまいとすることに変わりはないけど。

片手で広くない背を撫でて、もう片方で髪を梳く。俺の首筋に顔をすり寄せるアズは安心しきった表情で目を瞑っている。これはあれだ。イイ感じってやつだ。

ふいにアズが顔を上げた。視線をあっちへこっちへ動かして、うずうずしているのが分かった。

「どうしたの」

「ラース……」

なんていうか、もじもじした様子で艶やかな視線を送ってきている。そして目を閉じると強引に唇を重ねてきた。

「っ」

唇をこじ開けるようにして舌が入ってくる。生まれて初めてのことに少し戸惑うが、とりあえずそれに応じるように俺も舌を差し出して絡めた。

「ん、……」

「はあ、ん……ふ……っ」

必死になって絡めて、奥へ奥へと入ってこようとする。俺もまあそんなに余裕があるわけじゃないけど、そんなアズがすごく可愛く見えた。口腔を動き回るそれにしばらくされるがままになっていたが、さすがにもう息が苦しい。

尚も啄^{つば}もうとしてくるのを宥めて唇を引き離すと、解けたそこから銀糸が伝った。

「っはあ……ラースう……」

眉を八の字にして物足りなさげに唇を注視される。お互いの唾液で濡れそぼったアズのそれはてらてらと妖しく光っていた。

やたらと密度の濃くなった空間でやっと息を吸い込む。二人分の熱気も一緒に体内に入ってくるような、いやその内一人分の熱気は俺から発せられているのか。などとよく分からないことを考えていると、アズが「こんなのじゃ全然足りない」とでも言うような、潤んだ瞳で見上げてきた。

「俺……えっちしたい」

予想してなかったわけじゃないというかなんとというか、しかしストリートな物言いに言葉を失ってとっさに反応できないしていると、

「……いや？」

「いやじゃない、けど……」

「けど……だめ？」

ダメなわけないけど、その、何分純真な天使ですのでこういう刺激に慣れていないもので。

「……ぶっちゃけ今のキスだけで結構いっぱいだったから」

「ラース……したことはないんだよね？　じゃあ俺……ラースがしたくなるまで我慢する」

残念そうに目を閉じて胸に顔を埋めてくる。すりつく様がやつぱりすごく可愛く見えるんだけど、俺の目はどうかしてしまったんだろうか。

けどちょっと待ってほしい。

「したくないとは言っていないけど」

「え！？」

「言っていないけど」

「え！？　わかんなかったっ」

「わかってよ」

「いじめんっ」

自分でも無茶なことを言ってると思うけど、慌てたアズはそれに気づいてないようだ。

「じゃあ……いいの？」

「うん」

「じゃ……最後までしないからちょっとしていい？」

うん、と答える前に軽く唇を塞がれる。そしてそのまま押し倒された。

「え、……ん？」

「あ、ごめん 痛かった？」

弾力のある雲の床は背骨が当たっても痛くない。ってそうじゃない。腑に落ちないという思いを込めてアズを見上げる。

「どうしたの？」

「この体勢なに？」

別にアズにやられるのが嫌ってわけじゃないけどでもなんていうかイメージとか思ってたものと違うというかいや別に嫌ってわけじゃないんだよ決して、という長いセリフが浮かぶ。ひとまずそれは言わないで飲み込んでおく。

すると、

「あっラースの方がいいの？ 俺どっちでもいいよ」

心の内を読まれたのか、にこっと笑って俺の上からどいた。その隙に上半身を起こす。

「俺はどっちも好きだから」

「そんなけろっと」

なんかあつさり爆弾発言された気がするんですがそれは一体どういう意味？ と詳しく聞きたいところだけど、そろそろ俺も辛くなってきたので。

「……じゃあ最初はアズが上ね。次は交代で」

「え？ いいの？」

「俺にも考えがあるの」

「どういう？」

「まだ内緒」

とりあえずはアズのお手並み拝見させてもらおうという考えだ。もちろん最後まではさせないけど。最初から俺がやって、アズに期待外れとか思われたら嫌だし。

じゃあ今度教えてね、と言いながら唇を合わせてきた。アズの手が頬を優しく撫でる。

それからぎこちない手つきで中途半端に上げておいたパーカーのファスナーを下していく。しかし最後の部分が外せないようで、不思議そうに上げ下げしている。その下に着ていたＴシャツもどうすればいいのかよく分からない模様。

「脱がせていい？ ……これどうやって脱ぐの？」

「人間の服と構造は一緒だよ。ていうかこれ人間界で買ったし。頑張ってる」

「俺着たことないからわかんない……意地悪しないで脱いで？」

「脱がす楽しみとかないわけ、別にいいけど」

「何でそんなこと知ってるの？」

きょんとんとして見つめてくるアズに、内緒、と言だけ答えて上着を脱ぐ。いかに熱気のこもった閉ざされた空間といえど、直接肌に空気が触れるのは少し寒い。

曖昧な返答にアズはさらに食いついたようで、

「どうして!？」

ぐつと顔を近づけてきた。

「色々見聞きしたし」

その肩を軽く押さえてアズの胸元を飾る黒いネクタイを解く。先には神への反逆の証である逆十字の刻印がなされている。その部分を隠すように置いて、胸を撫でて首筋に口づけた。

「あ、い、色々って？ 誰から何聞いたの？」

「DVDとかインターネットとか便利な時代になったよね」

「でいー……?」

「今度教える」

デジカメを見て魂を吸い取れる道具だとはしゃいでいた姿を思うと、多分恐らく絶対DVDやインターネットについても理解できないんじゃないだろうか。

そのまま甘く噛んでやると肩が少し竦んだ。お喋りはここまでという合図だ。

それを汲み取ったアズはよいしょと体勢を直すと、また俺の上に跨った。

「こっちは似てるからわかるよ」

そう言いながら俺のボトムに手を掛けてボタンを外し、ファスナーを下ろした。若干膨らんだ下着が露出する。……結構恥ずかしい。

「アズも脱いで」

俺一人だけ脱いでる状況は冷静に考えておかしい。アズも平等に脱ぐべきだ。全部を剥かれる前にそう言うと、アズは俺に跨^{またが}ったまま慣れた手つきで上の服を脱ぎ去ると、そのまま自分の横に投げ置いた。

俺よりも白い肌や鍛えてる様子もなく柔らかそうな肢体に、紅い髪がよく映えている。

「ラースはおとなしくしててね」

遠慮がちに胸に手を置かれ優しく押し倒される。アズは一度じっくり俺の身体を眺めてから、首筋から鎖骨のあたりに舌を這わせて

きた。心地好いとも気持ち悪いとも違う感覚。アズの右手はそのまま胸部を撫でさすり、ふいに胸の突起に触れた。

「っ」

片方を揉まれつつ、もう片方を舌で転がされて吸われる。そのまま簡単に快楽に吞まれるわけではないにしろ、敏感な部分を弄られてまるで何も感じないわけではない。普段触れることがあっても、それは体を洗うために布が触れたりだとか衣服が当たるくらいで、明確な意志を持ってそれに触れることはないわけで――、グダグダとつまり何が言いたいのかというと、性感帯をこねくりまわされて反応しちゃってもしょうがないよねということだ。ましてや好きな相手になら尚更。

声を出すほど弱くはないものの、アズの動きに呼応してその部分はじわじわと着実に張り出してきていた。

「……反応してるね？」

幼さを残しているとも言えども悪魔がその変化を見逃すはずもなく、下着越しにその膨らみを指の腹で撫でる。

「……っ、そりゃするよ」

「アズがそんな顔するなんて新鮮」

自分で自分の顔が見られない状態でよかった。そんな顔ってどんな顔だ。舌なめずりしてるアズの方がよっぽど扇情的な顔をしていると思う。

アズが下着ごとデニムを下ろすと、熱を持ったソレが顔をのぞかせた。そこまで大きくない手のひらで硝子細工に触れるように優しく

く包み、その感触を確かめるように緩く撫でてくる。

「は……」

熱っぽい吐息がもれる。俺と一瞬目が合ったかと思うと、そのまま手に握るモノにはくついた。

「……っ」

「……ッふ……」

思わず目を瞑って、その刺激を逃そうと軽く唇を噛む。汚いはずのソレを丁寧な横側も裏筋も舐め上げられて、無意識のうちに声が出そうになる。先端を舌で弄られながら茎を扱かれると、段々頭の中が白くなっていた。

「んう……っ、ん……く……っ」

「アズ、ちょ……無理、しなくていいから」

「は……うっ……」

ぼんやりとした頭で、自分よりも苦しそうな声をあげるアズに声を掛ける。くしゃりと髪を撫でてやると口を離して、涙をいっぱい溜めた瞳でソレを名残惜しそうに見た。いくら好きとはいえ男のソレを啜えるなんてやはり抵抗があるのだろう。と思ったら。

「……もう我慢できない……俺のもしていい？」

「え？」

俺が返事をする前に自分のズボンを下ろすと、すっかり興奮しきったモノが重力に逆らってそそり勃った。ちなみにそんなに大きくはなく俺のよりも小ぶりなぐらいだったが、粘度のありそうな先走りが滲み出ている思わず見入ってしまう。アズはすぐに自分のモノと俺のをまとめて持って擦り合せた。

「んん、あ、あ……っ」

手を上下に動かして、その動きに合わせてアズの口から悦びがもれ出す。次から次へと押し寄せる快感を貪り尽くそうとするように頬を撫でて口づけ、零れ落ちた涙を舐めとってやると、アズからもっと激しくキスされた。

「ん……ッ、んうっ」

「……っ……」

こんな状況でおとなしくなんてできるわけがない。少し上半身を起こして二つの熱に手を重ね、アズの手ごと上下に動かした。

「はあ、あ……ッラースう……」

「アズ……」

こつちを煽るような声。もっと聞きたくて、自然と手の動きは速まっていく。手を濡らす二人分の蜜は交じり合って、もはやどちらのものか判らない。欲望を掻き立てるような匂いが鼻腔をくすぐる。空いている指先で存在を主張するように勃つ胸の飾りを弄ると、一際大きく哭声をあげた。

「ああつ、あ、ラース……イイ……もつと……っ」

そのまま腰を反らしてギュッと俺の頭を抱え込む。すごい早さで脈打つ心臓の音が聞こえてくる。アズの茎を握ったまま先端を丸く円を描くようになぞると、身体をびくびく震わせた。ピンと張り詰めたそれは今にも決壊しそうだった。

「あん……はあ、も……イク……」

熱を含み潤んだ瞳で哀願するように見つめてくる。その淫靡さに思わず息を呑んだ。

「俺もそろそろ限界……、一緒にイこ」

コクコクと頷き、華奢な臍ごとソレを押しつけてくる。背中に戻された手は俺を逃すまいと力強い。二つの芯を扱く手をまた速めて先端を凹みに合わせて潰すように揉みしだいた。

「やつ、ああっ——ッ」

「……——っ」

アズが達するのとはほぼ同時に俺も熱を吐き出す。手についた液体はどろりとした白濁。

むせ返るような昂ぶりの余韻と二人の混ざり合う吐息、全身を縛る痺れるような快楽だけがその空間を支配していた。

… … …

「はー……気持ちよかったあ」

乱れた呼吸が整ってきたころ、アズは先程までの余韻を思い出すように俺の胸に顔を埋めたまま独りごちた。

俺は未だに夢の中にいるようにぼーっとしながらただアズ髪を梳くように撫でていた。数時間前までを思えばアズとこうして触れ合っていること自体が夢のようなのだが。抱き締めあって、キスして……一気に進みすぎただろうか。それに悪魔と真名を交わしたことで何か影響はないだろうか。今は特に変化等は感じられないけど、そのうち出てくるかもしれない。

ただ、腕の中に納まっているアズを見てるとそんなことはとても些細なことのように思えた。もし万が一何か起こったら、そのときはひとしきりアズと騒いでからサファなりエルなりに相談すればいいだろう。あの二人だつて通ってきた道なんだろうし、俺たちに乗り越えられないはずはない。

「あ、清に知らせなきゃね」

思い出したようにアズが顔をあげる。

そうだった、すっかり忘れ……いやいやそんなことはないけど、清にもきちんと報告しないと。たくさん迷惑かけたし、何より力になつてくれた。

「明日行こうか」

「うん、もう夜だもんね」

「俺たちは別にいいけど変な時間に行くとまたため息吐かれるから」

くすくすと可笑しそうに笑うアズにつられて俺も少し笑った。それから目が合って、どちらともなく触れるだけの軽いキスをして――、もう一度微笑み合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9335o/>

The story of “ R ” —怠惰天使の日常—

2012年1月12日07時06分発行